

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

稲葉 正 就

目次

はしがき	二四
一、Thon-mi 文法の所説	二四
イ、添前字の意義	二四
ロ、添後字の意義	二五
二、活用が無い動詞	二五
三、活用動詞の能動の三時	二五
イ、能動の現在	二五
ロ、能動の過去	二五
ハ、能動の未來	二五
四、活用動詞の受動の三時	二六
イ、受動の現在	二六
ロ、受動の過去	二六
ハ、受動の未來	二六
五、活用動詞の活用の仕方	二六
六、活用動詞の分類	二七
七、Thon-mi 文法の重要性	二八
八、Thon-mi 文法の示す意義	二八
むすび	二八

略 語

- Abhisamaya.—Abhisamayālamkāra-loka Prajñāpāramitā-vyākhyā.
 Koṣa., Koṣa-vyā.—Abhidharma-koṣa., ~-vyākhyā.
 Das.—S. Chandra Das: A Tibetan-English Dictionary. Calcutta, 1902.
 Mv.—Mahāvvyutpatti (譯本).
 Mādḥ.—Mādhyamika-vṛitti.
 Vajra.—Vajracchedikā-prajñāpāramitā.
 Si-tu.—Si-tu: Si-tuḥi Sum-rtags (Das: チベット語文法書所収本).
 Sukha.—Sukhāvati-vyūha.
 Hṛidaya.—Prajñāpāramitā-hṛidaya-sūtra.

は し が き

チベット語の動詞についての研究書としては、Jacques Durr 氏の次の二書が、動詞のみに關する單行本として唯一のものであり、且つ最も有力なものであらう。

Morphologie du Verbe Tibétain. Heidelberg, 1950.

Deux Traités Grammaticaux Tibétains. Heidelberg, 1950.

この二書の中、前書は、活用動詞（特に「形動詞を中心として」）についてその活用を根本的に *Morphologie* の立場から組織し直して論じた研究である。そして最後に、添前子音や添後子音に對する A. Conrady 氏や St. Wolfenden 氏の近代の學者の説と、チベット古典文法家の説を擧げて、それらを批判してゐる。次に後書は、チベットの古典文法書である Don hgrub の “*Shel Me-lon*” と Si-tu の註釋との二註釋書の中から、Thon-mi の性入法の動詞に關する解釋に對する註釋の部分のみの本文を抽出して掲載し、それをフランス譯して、且つそれに對する研究的序文を卷頭に附したものである。前書に於て最後に古典文法家の説にまで言及したから、後書に於て専ら古典文法書の研究をなし、以て動詞研究の姉妹篇としたものであらう。とにかく、この二書は、難解にして未踏なるチベット語動詞を根本的に解明しようとした相當な力作である。そして古典文法學にまで溯つてゐることは、チベット古典研究を提唱したチベット學の大家である Jacques Bacot 氏の行き方を繼承せるものであつて、この種の研究には當然なされるべき手續きでもある。

しかしながら、Durr 氏の研究の対象となつてゐる動詞の用法は、佛典に用ひられてゐる動詞の用法ではない。前書の四五頁に法華經の信解品の最初の短い一節の梵文とそのチベット譯との對照を掲げてゐるが、兩者の對照を探究することから當惑が生ずるであらうといふ意味を述べてゐる。そしてそれ以外に佛典梵文との對照は全くなされてゐない。恐らく、翻譯佛典のチベット語動詞の用法は、一種獨特なものであるから、それを全く除外してしまつたのであらう。

また Durr 氏は、前書の二二頁に於て、「子音變化の誤れる解釋」といふ項目を掲げて、動詞が活用する際の子音變化に對する誤れる解釋の罪を負はねばならないのは、誰よりも先づ Thon-mi 自身とその直接の註釋者であるとなし、Thon-mi の文法を誤れるものとして酷評してゐる。Durr 氏の所説がこのやうであるとしてみれば、彼は Thon-mi 文法註釋者たちの古典文法學の研究に溯つてはゐるが、彼にとつてその古典文法學がどれ程まで役立つてゐるか疑問とせざるを得ないと思ふ。

さて、わたくしは、チベット語佛典を正しく讀むことを志して、それに用ひられてゐるチベット語の解明に努力してきた。そのチベット語は第九世紀初頭に成立し、準梵語ともいふべき人工語 (langue artificielle) であることはもはや周知の事實である。^①すなはち、それが準梵語であるといふことは、純粹のチベット語ではなく、チベット語を以て梵語を寫した極めて梵語的な一種獨特の學問用語であることを意味する。從來の辭書に示されてゐる動詞の活用は、このやうな佛典チベット語のそれではない。また、前掲書に於て Durr 氏の研究の対象となつてゐる動詞の活用も同様に佛典チベット語のそれではない。さうであるから、從來の辭書は勿論のこと、Durr 氏の努力せられた成果を以てしても、チベット語佛典を讀むことはできないのである。

そこで、チベット語佛典を正しく讀むためには、佛典に用ひられてゐる動詞の獨特徴な活用を研究する必要がある。

幸にチベット大藏經といふ龐大な梵文藏譯の資料が存在するのであるから、原文の梵語の動詞とそのチベット譯語のそれとを對照すれば動詞の活用を知りうるわけである。しかしそれは未だ何人も手をつけてゐないことでもあり、また多數の動詞全部に互つてその用法を一つ一つ對照研究することは至難なことでもある。早くからその必要を切實に痛感してゐたのであるが、遂に無爲に數年を経てしまつた。その間、一昨年に「チベット語古典文法學」なる一書を上梓したのではあるが、その際には、未だ確實な結論に到達してゐなかつたので、辭書に示されてゐる從來の活用をそのまま踏襲して、「あとがき」にその旨を斷つて刊行し、他日を期すことにしたのであつた。そして昨年に、恩師山口益先生の還曆記念論文集に、はじめてその一端を發表した。しかしそれには頁數が極めて制限せられたので、b添前子音のみの問題に止まり、しかも殆んど用例を掲げることができなかつた。そこで、いまここに改めて活用動詞全般に互つて述べようと思ふのである。しかし活用動詞全般といふことは極めて至難なことで、一朝一夕にすべての活用動詞に當ることは不可能である。したがつて、いまの段階としては、同じ活用形式と思はれるものは類推してその類の中に入れて活用を推定するより致し方がない。しかし、推定も困難で活用形態が不明のものも相當多數存在する。また未審の問題も残つてゐる。要するに、現今とても確實な結論に到達してゐるわけではない。それ故に、不完全のそしりを免れないのであるが、敢へてここに發表したのは、諸先生先輩の御教示を仰ぎたいがためである。

註① 拙著「チベット語古典文法學」二〇—二四頁參照。

一、Thon-mi 文法の所説

チベット語文法學は、申すまでもなく、第七世紀の初頃に、王の命によつて、Thon-mi sam-bho-ta がインドへ派遣せられて梵語文法學を學び、歸國して、「三十頌」(Sum-cu-pa)と「性入法」(Rtags-kyi hjug-pa)との文法論を著作したのに始まる。^①その性入法の第一二偈——第一五偈は、動詞の添前字の意味を説くものであり、第二五偈は動詞の添後字の意味に言及したものである。^②

「はしがき」に述べた如く、Durr 氏は、動詞の活用 of 誤れる解釋の罪を負はねばならないのは誰よりも先づこの Thon-mi 自身とその註釋者であるとなしてゐる。すなはち、

「かれらは語根の本質を探究せずに、單に添前字や添後字のみを解説し、この添前字や添後字に、動詞の態(能動・受動)や時制(現在・過去・未來)のすべての意義を持つて行つてゐる。^③」

と述べて、動詞は語根を中心として研究せねばならないものであるにもかかはらず、古典文法家たちは單に前後に添接せられる子音のみの解説だけに了つてゐるのは誤りであるといふ。しかも更に、Thon-mi が説く前後添接子音の意味にもまた誤りがあることを主張してゐる。

さて、この Durr 氏の所論の適否はともかくとして、われわれが佛典の梵文とそのチベット譯文とを對照研究してゆくとき、Durr 氏が酷評を下した Thon-mi の所説と奇しくも全く一致することを發見するのである。その一致たるや、聊かの矛盾もないといふことに於て實に驚かざるをえないのである。さういふ事實からいつて、Thon-mi の

所説が妥當性を缺いてゐると速斷すべきではなく、Thon-mi が説くところに、むしろ何らかの意味することが示唆されてゐると考へるべきではなからうか。かの Bacot 氏がチベットの古典に溯らねばならないとした意圖も、古典が示す何らかの意味を探究し顯揚するためではなかつたのであらうか。とにかく、わたくしは Thon-mi の説くところに意義を見出しうと思ふから、本論を述べるに先立つて、最初にそれを掲げることにする。

イ、添前字の意義

先づ Thon-mi の性入法の第一二偈——第一五偈の本文とその和譯を掲げるならば、

第一二偈 pho-ni ḥdas dan gshan bsgrub phyir/ 男性は、過去と他なるものとを成立せしめるべきためである。

第一三偈 ma-niḥ gn̄s-ka da-ltar ched/ 中性は、兩者と現在とのためである。

第一四偈 mo-ni bdag da ma-ḥoṅs phyir/ 女性は、自なるものと現在と未來とのためである。

第一五偈 ḡin-tu-mo-ni mñam phyir-ro/ 轉女性は、平等のためである。

といふ四偈である。その中、男性・中性・女性・甚女性といふのは、性入法第三偈に添前字が性分類せられてゐて、それに對して諸註釋者はみな次の如く解釋が一致してゐる。

男性 || b- 中性 || g-d 女性 || h- 甚女性 || m-

また第一二偈に「他なるもの」(gshan)、第一四偈に「自なるもの」(bdag) といふのは、諸註釋者の解説を參照してもその意味を明確に把握し難い。Bacot 氏は、この二つの文法用語について詳しく註記してゐるが、彼の文法學術語の INDEX に於ける bdag の結論的な説明を見ると、

bdag *Le sujetif, la voix active, opposé à gshan l'objectif ou passif.* ③

「自なるもの」主格的なるもの、能動態、

〔反對語〕「他なるもの」すなはち目的格的なるもの、受動態に對する。

といふ解説を施してゐる。すなはち、動作の實際の作者が主語となつてゐる能動の文に於ける動詞は、主格的であるから「自なるもの」と名づけたのである。また動作の實際の作者が主語とならず、目的語が主語となつてゐる受動の文に於ける動詞は、目的格的であり實際の作者からいつて「他なるもの」であるからさう名づけたのである。恐らくこのやうな意味に Bacot 氏は解釋したのであらう。能動・受動といふ西歐語文法の用語を直ちに當てはめることは、やや適切を缺く恐れなしとしないが、しかし結局は當らずと雖も遠からずといふことになるであらう。であるから、わかり易くするために一應いまは、

自なるもの || 能動 他なるもの || 受動

と言ひ換へることにする。

次に第一三偈に「兩者」といふのは、諸註釋者ともにみな能動・受動の二つを指すと解説してゐるから、それに從ふ。

最後の第一五偈の「平等」とは、諸註釋者はみな、三時二動の差別なくすべてに平等であるといふ意味であると解釋する。すなはち、三時二動のすべての場合に用ひられるといふことであつて、これもそれに從ふ。

以上の解釋にしたがつて、わかり易く言ひ換へれば次の如くなる。

第一二偈 添前字 b— (時制) 過去 (態) 受動

第一三偈 添前字 *g-d-* (時制) 現在 (態) 能動 受動

第一四偈 添前字 *h-* (時制) 現在 未來 (態) 能動

第一五偈 添前字 *m-* (時制) 現在 過去 未來 (態) 能動 受動

ロ、添後字の意義

次に添後字について、*Thon-ni* は性入法第二五偈に、

sna-ma shon-fjug lha bshin sbyar/

〔添後字は〕前の〔基字に〕結びつくが、〔三時二動に關しては〕五添前字に従ふ。

といふ。すなはち、添後字は先行の基字に結合して語を成立せしめるが、三時二動に關しては主として添前字を以てあらはされるといふ意味である。*Thon-ni* が説く動詞の時制や態は、添前字のあらはす意味だけで了つて、添後字のそれには詳しく言及せられてゐないのである。

この第二五偈に對して、諸註釋者は、添後字 *-s* 或は再添後字 *-s* 及び再添後字 *-d* が過去をあらはすことを補足してゐる。そして *Thon-ni* がそのことを説いてゐないのは、それ以外の添後字は三時二動をあらはさず、専ら添前字の力が主たるものであるからであるといふ。事實上、諸註釋者のいふ如く、*-s* と *-d* とは過去をあらはすことが多いから、これを補足すべきである。その中、*-d* は第九世紀初頭に廢せられてゐるので、敦煌出土の佛典などの古寫本佛典を除いて現存のチベット大藏經には出てこない。故にわれわれは、添後字に關しては *-s* のみについて注意することにしよう。

註① 詳しくは拙著前掲書三一—二〇頁参照。

② 偈の數へ方は、Bacot: *Les Ślokas Grammaticaux de Thonmi Samboja*. Paris, 1928. に所載のものに従ふ。Durr 氏の數へ方も同じである。

③ ことに添前字・添後字といったのは、Thon-mi に於てはすべて文字を以てする綴字論的な文法であるからである。添前子音・添後子音といふのと同じである。

④ J. Durr: *Morphologie du Verbe Tibétain*. Heidelberg, 1950. p. 21.

⑤ Bacot: *ibid.* pp. 56, 57. foot-note.

⑥ Bacot: *ibid.* p. 87.

二、活用が無い動詞

さて、佛典に用ひられてゐるチベット語の動詞の用法を研究するには、梵文原典に出てゐる梵語の動詞がその特性として能動・受動の二態と現在・過去・未來の三時を明確に示してゐるから、それに對して如何なるチベット語の動詞を以て翻譯してゐるかを對照研究すればよいわけである。幸にチベット譯佛典は梵語を「透寫」してゐるといはれる程、他の翻譯に類を見ないまでの直譯體で譯せられてゐる。稀には受動態の文章が能動態で譯せられてゐるといふやうな例外はある。^①しかしそれは極めて特殊な例外であつて、たとへそのやうな場合でも動詞に附く助動詞或は目的語に附く目的格助辭などによつて容易にそれを知ることができるのである。また、北京・デルゲ・ナルタンなどの諸版本の間に多少相異があるが、それもそれ程多くあるわけではない。ここに對照に用ひたチベット譯テキストは、な

るべく諸版對照校訂したものをを用ひるやうに留意した。

そこで、梵藏佛典を比較對照してゆくならば、チベット語の動詞の中で三時二動を表現するのに全く活用を有しないものがある。例へば、梵語 *jñā* (知) に對するチベット語 *ces-pa* についてみると、

〔能動・現在〕 *jānāti* : *ces-pa*, *ces-par byed*

〔能動・過去〕 *ajānāt* : *ces-pa*, *ces-par byas*, *ces zin-pa*

〔能動・未來〕 *jñāsyati* : *ces-par hgyur*

〔受動・現在〕 *jñāyati* : *ces-par bya*

〔受動・過去〕 *jñāta* : *ces-pa*, *ces-par byas*

〔受動・未來〕 *jñātavya* : *ces-par bya*

と云々如く對照しようことは、一々文章の用例を擧げるまでもないであらう。この對照によつて見られるやうに *ces* なる動詞は活用が無く、多くの場合助動詞の力を借りて三時二動をあらはしてゐる。

このやうに活用の無い動詞は甚だ多く、動詞全部の約半數を越える。そしてその形態に於て、活用を有する動詞と同様に、各添前字を有するものがあり、添後字・再添後字・再添後字・再再添後字・再再再添後字を具するものもある。例へば、

○——形 *rig-pa* 知る。

b——形 *bkur-ba* 敬ぶ。

g——形 *gzigs-pa* 觀る。

d——形 *dmigs-pa* 緣ずる、得る、理解する。

h—形 *hdod-pa* 願ふ、欲する。

m—形 *mthob-ba* 見る。

といふやうに、すべての形態の動詞があつて枚舉にいとまがない。

これらの活用の無い動詞の添前字及び添後字・再添後字の-sは、申すまでもなく、何ら三時二動の意味をあらはしてゐない。したがつて、それらは *Tthon-mi* が説く對象ではあり得ない。

註① 本稿二六一頁三行目の例を参照。この例に於ては、梵文の主語である *disian* がチベット譯文では *btas-la* といふやうに、*la* といふ目的格助辭が附けられてゐるから、受動を能動に譯してゐることがわかる。勿論 *la* といふ動詞形は能動の現在形である。

三、活用動詞の能動の三時

さて次に、活用を有する動詞について、梵藏比較對照を行はねばならない。先づ順序として能動より検討を始め、チベット譯が如何なる活用形態の動詞を以て、どのやうに翻譯してゐるかを考察しよう。

イ、能動の現在

最初に、能動の現在について見るならば、例へば、

indhanam agnir dahati (Māh. X.) : *mes bud-çin sreg-go*

火が薪を焼く。

agnij parātmanam eva dahati (Mādh. III.)

me-ni gshan-gyi bdag-nid kho-na sreg-par byed

火は他體をこそ焼く。

といふやうに、助動詞 byed が用ひられると否とにかかはらず、常に現在形を以て譯せられる。能動態の現在形のチベット語動詞は、從來の辭書に示されてゐる通りと考へて先づ間違ひない。

ロ、能動の過去

次に能動の過去について考察するに、梵語には第一——第三過去の三種の用法があるから、それぞれに對する譯語を検討してみよう。

(1) 梵語第一過去の場合

acruṇi prāmuṇcat (Vajra. XIV): mchi-ma phyun-ste/

涙を流した。

bhagavato bhāṣitam abhyānandan (Vajra. XXXII.)

bcom-ldan-ḥdas-kyis gsuns-pa-la mñion-par bstod-do/

世尊によつて説かれたところを歡喜した。

(2) 梵語第二過去の場合

atra-āha (Mādh.): ḥdir smṛas-pa

ここに〔抗論して〕いつた。

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

rūpaskandham adhiḥikītyāṇa/ (Mādh. IV.)

gzugs-kyi phui-poḥi dpañ-ḍu mdzad-nas bcaḍ-pa

色蘊に關して〔動範圍は〕説いた。

nāpi me kācit saṃjñā vāsariññā vā babhūva/ (Vajra. XIV.)

ñā-la ḥdu-ḡes ciḥaṇ med-la ḥdu-ḡes med-par byuñ-pa yañ ma yin

われに或る想も非想もまた有るのではなかつた。

(3) 梵語第三過去の場合

mahānagarīm.....prāvīkṣat/ (Vajra. I.): groñ-khyer chen-por.....shugs-so/

大城に入りたまふた。

aṅga-pratyāṅga-mānsāny acchatsit (Vajra. XIV.)

yañ-lag dan ñiñ-lag rñams bcaḍ-par gyur-pa

支節の肉を割截した。

以上の如く、梵語の何れの過去の場合にもチベット譯は過去形で譯されてゐる。これらのチベット語の過去形は、從來の辭書に示されてゐる通りであると考へて先づ誤りないであらう。

ハ、能動の未來

能動の最後に、未來はどういふ動詞形を以て翻譯されてゐるだらうか。それについては梵語には、第一と第二未來との二種があるが、第二未來についての用例を未だ見つけてゐないので、以下第一未來の場合のみについて考察する。

能動の未來は、例へば、

pacčād valksyate (Kocā-vyā. II) : hog-nas hchad-par hgyur-ro/ (Kocā. II.)

後に読んであらう。

といふやうに、

動詞現在形不定法+hgyur

といふ表現するのが常である。このやうな表現形式は、どの佛典に於ても到る處で見られ枚舉にいとまがない。この形式に於て現在形が用ひられるのは、hgyur なる助動詞を附加するために不定法にするから現在形としなければならぬと考へられるかもしれない。しかしチベット語に於ては、すぐ前の用例の如く、bcad-par gyur-pa (讀殺し^つ。或^たつた。)のやうに過去形の不定法があつたり、また次に述べるやうに bsreg-par bya (讀^められる、讀^められる^{べき})といふ受動の不定法があつたりする。したがつて、未來の表現に於ても、もし動詞の未來形があるならば、その未來形の不定法を構成して hgyur を附加してもよい筈である。故に、不定法にするから、現在形を用ひるといふ理由は、チベット語に於ては成り立たないと思ふ。

それはともかくとして、もし hgyur といふやうな助動詞を伴はず、動詞だけで未來を表現するならば、如何なる活用形を用ひるであらうか。それについて、中論の月稱釋の第三品が能見 (darśana) なる眼根に關する阿毘達磨の考へ方に對する批判を述べてゐるから、drig (見^る) といふ語根から來る種々の形で論理を展開してゐるが、その未來形 draksyati をその品の中から残らず拾ひ出すと次の如くである。

kathan draksyati tat parān/ (Mād. III. 第2偈) : de gshan-dag-ja ji-tar lta/

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

かのもは云何にして他の諸〔物〕を見るであらうか。

tatāpy agnivat parān draksyati/ (Mādh. III.)

de-ita-na yañ gshan-la lta-ba yin-te me bshin-no/

それはさうでもあらうが、恰も火の如く、他のものを見るであらう。

evaiñ darçanañ parān eva draksyati na svātmānam..... (Mādh. III.)

de bshin-du lta-ba yañ gshan kho-na-la ltañi/ rañ-gi bdag-ñid-ni ma yin-no.....

それと同じく能見は他のものをこそ見るであらうが自體を見ないであらう……

この最初の例は第二便後半の Poussin 譯本一頁と再版出づる第二三冊の draksyati が四回用ゐられてゐる。最初の例は例はあつたが譯の關係上 hggyur が省略せられたところからいふことが、他の例は長行の yañ の lta-bar hggyur と譯してゐるからいふ。したがて四回とも助動詞を用ひず、しかも lta なる現在形を以て譯してゐるのがある。

このやうに、現在形動詞のみで梵語の未來を翻譯してゐる例が屢々見うけられる。

imain dharma-pariyāyam uđgrahisyanti dharayisyanti vācayisyanti pariyavāpsyanti parebhyac [ca vistareṇa] saṃprakācayisyanti..... (Vajra. XIV.)

chos-kyi rnam-grans ḥdi len-pa dan/ hdzin-pa dan/ klog-pa dan/ kun chub-par byed-pa dan/ gshan-dag-la yañ-dag-par rab-tu ston-pa.....

この法門を受持讚誦し、〔而して〕他人に〔詳細に〕宣説するであらう……

bodhisattvā mahāsattvā bhaviṣyanti/ (Vajra. VI.)

byañ-chub-sens-dpañ sems-dpañ chen-po-dag hbyun-to/

菩薩摩訶薩があるだらう。

avikṣiptacittō manasikarisyati (Suktha): gyeñ-ba med-pañi sems-k'yis yid-la byed-na/

亂れざる心を以て作意するであらう。

また、このやうな用例を古典文法書に求めるならば、具慧生歡喜 (Blo-ltan dgag-bstkyed) という文法註釋書^①の性入法第一四偈にhgが未來をあらはすと説くのに繫する用例として、

snags hgrub/ 密呪 (の修法を) 成就するだらう。 sdig-pa hdzad/ 罪は消えるだらう。

bgegs hjom/ 障礙を克服するだらう。 lan-du hjug/ 道に入るだらう。

gdul-bya hdu/ 修行者が集るだらう。 sañs-rgyas hbyun/ 佛が出現するだらう。^②

(以上 Schubert, p. 23, 12b.)

といふ文があげられてゐて、現在形動詞だけで未來をあらはしてゐる。キジ Chandra Das の藏英辭典^③のやうな例が見られる。

khyod dan na sdon-ste hgro: you and I will go together. (Das: p. 721; 意志未來の意に譯してゐる。)

あなたとわたしと一緒に行かう。

dgag-pañi sems-k'yis bsdoñs-te hgroho: will go accompanying one another cheerfully. (Das. p. 721)

心樂しく、つれ立つて行くだらう。

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

このやうな表現に於て、現在ではなく未來であるといふことを示すためには、未來の助動詞を用ひず、未來の意味を有する言葉を挿入してそれをあらはす。

san t̃i-ma car-bahi dus der ḡroḡo/ (Dharma-bhadra.)^②

明日、太陽が昇るその時に行くだらう。

nam laṅs-pa dan ḡro/ (Schubert.)^③

夜が明けると(明けたとき)行くでせう。

以上のやうに、現在形動詞だけで未來をあらはしてゐる用例は相當多數である。

それでは、從來の辭書には未來形と呼ぶ一つの活用形が示されてゐるが、それが未來をあらはすものではないかといふ疑問が當然生ずるであらう。それについて、例へば、

bhāṣiṣye 'nam te (Vairo. II.): nas khyod-la bḡad-clo/

われは汝のために説くであらう。

といふ文に於ける bḡad は、從來の辭書に、(現) ḡchad (過) bḡad (未) bḡad と示されてゐる中の未來形であることは明瞭である。このやうに梵語の未來動詞の譯語にチベット語動詞のこの活用形が用ひられてゐることは先づ無いといつてよいのである。この翻譯例は特殊な例であるが、わたくしはむしろこの譯文は未來受動に意譯したのではなく、なからうかと思ふのである。といふのは、從來の辭書に未來形として出てゐる活用形は受動の現在か受動の未來をあらはすことは次の四のイとハに於て立證するであらうからである。すなはち、ここのチベット譯文は「われによつて汝のために説かれるであらう」といふ意味ではなからうか。梵語の bhāṣiṣye は受動の未來にも用ひられるが、しか

しこの梵文はやはり能動文と見るべきであらう。このやうに能動と受動とを反對に意譯してゐることは稀にある。例
くば、

na diṣṭaṇ diṣyate tāvad adīṣṭaṇ naiva diṣyate/ (Mādḥ. III.)

見らく已に見られたるものは見られず、未だ見られざるものも見られず。

re-shig bltas-ta mi lta-ste/ ma bltas-pa-laṇa lta-ba min/

見らく已に見られたるものを見ない、未だ見られざるものをも見ない。

といふ場合は、受動文を能動文に譯したものであつて、常に直譯を主とするチベット譯にもこのやうな例が稀には存在するからである。

ところが、われわれは、*bḥad-par bya* といふ表現を以て未來の意の譯語に當てられてゐるのを見ることがある。

例へば、俱舍論の歸敬偈に、

gāṣṭraṇ pravakṣyāmy abhidharmakoṣam/ (Koṣa-vyā. I.)

chos-mñion-mdzod-kyi bstan-bcos rab-bḥad bya/ (Koṣa. I.)

われは阿毘達磨俱舍論を説くであらう。

とある。これは俱舍論に限らず、どの論の歸敬偈にもよく見られる形式である。しかし、これは歸敬偈の場合に限られ、佛典の普通の文には殆んど出てこない。一般に佛典に於て *bḥad-par bya* といへば、(1)説かれる(受動・現在)(2)説かれるべきである(受動・未來)(3)説かしめる(使役)といふ意味に用ひられるのが普通であつて、能動の未來の意をあらはすことは先づかないといつてよい。ほぼ歸敬偈の未來に限られてゐるといふことは、この際の梵語の第一未

來は決意の義をあらはすものであらうから、佛典チベット語として次の四のハに述べる受動の未來（梵語の義務分詞の意に相當）の表現を以てその譯語としたのではなからうか。

いづれにしても要するに、從來の辭書に示す未來形を以て梵語の能動の未來を譯してゐることは特殊な場合のみであつて、普通ではそのやうな用法は佛典には先づ無いと考へてよい。このやうに些細に検討してゆくならば、佛典に於ては能動の未來は一般に現在形を以て譯せられてゐることを知るのである。口語に於て、

sañ rgya-gar-du hgro 明日イन्द्रへなぐだらう。

といふやうに表現するのは、チベット人は現在と未來との區別の觀念が元來比較的薄弱なものではなからうか。

註① 拙著前掲書三三・三六頁參照。

② J. Schubert: *Tibetische Nationalgrammatik*. Leipzig, 1937. p. 23, 12b.

③ 拙著前掲書附錄三〇頁一行目。

④ J. Schubert: *ibid.* p. 21, 6b.

⑤ 神亮三郎「解説梵語學」§217.

四、活用動詞の受動の三時

次に、受動についての考察に進まなければならない。先づ順序として受動の現在より始めよう。

イ、受動の現在

佛典に於て、受動の現在に、動詞不定法に *bya* なる助動詞を附加してあらはされる場合が最も多い。例へば、

ucyate (Mādh. III.) : brjod-par bya 云はれる。

upāḍyate (Mādh. X.) : ñe-bar blañ-bar bya 執受せられる。

sāḍhyate (Mādh. X.) : bsgrub-par bya 成立せられる。

saṃpradhāryate (Mādh. X.) : dpyad-par bya 熟考される。

といふ用例は枚擧にいとまがない程多數である。この際に用ひられてゐる動詞の活用形は、一見して明らかな如く、従来の辭書には未來形として掲げられてゐるものである。

このやうに 'bya とゞふ助動詞を用ひるゝことが最も多いが、必ずしも助動詞を必要としない。例へば、

rūpān viṣayatvenopadīcyate/ (Mādh. III.)

gzugs-ni……yul-ñid yin-par ñe-bar bstan-to/

色は對境として教へられてゐる。

[anya-yittiti] grahaṇena daurmanasya-varjitān grīhyate/ (Koca-vyā. II.)

tshor gshan shes-bya-ba smos-pas-ni yid mi bde-ba-las gshan-paḥi tshor-ba gzun-ño/ (Koca. II.)

余の受といふ語によつて憂より以外の受が驅められてゐる。

kasya……kāraṇam iti parikalpyate/ (Mādh. IV.) : gañ-gi rgyu yin-par brtag/

何ものための因として分別計想せられるのか。

といふやうに、動詞のみで受動の現在が譯されてゐるのを屢々見うけるのである。

以上の如く、受動の現在に 'bya なる助動詞が有る無しにかかはらず、従来の辭書に示す未來形を用ひることは何

人も否定できない事實である。そして他の活用形を用ひることは絶対にないのである。そこで、從來の辭書には未來形と名づけてその活用形を掲げてゐるけれども、佛典チベット語としてはそれを受動態の現在形と呼んだ方が適切であると思ふ。

ロ、受動の過去

チベットの註釋者 Sit-tu は、Thon-mi の性入法の第二二偈第一三偈の受動の用例を數多く長々と掲げてゐるけれども、その中に、受動の過去の用例が全くない。Sit-tu 註以外の古典文法書もみな同じである。しかしわれわれはそれで満足することはできない。すなはち、受動にも三時がなければならぬ。そこで、受動の過去についての考察に入らう。佛教梵語に於ては、受動の過去をあらはす場合は、専ら過去受動分詞の形が用ひられてゐる。それに對するチベット譯は如何なる活用形を以て譯せられてゐるだらうか。いま梵藏對照すれば、

evam uktah : de skad ces smras-pa

そのやうに云はれた。

deva-dattah : lhas byin

天によつて授けられたもの。

samantāt parikṣiptam (Mv. 6068.) : kun-nas bskor-ba

普く圍繞せられたる

sa ca bāla-prihag-ianair udgrihitah (Vajra. XXV.)

de yañ byis-pa so-sohi skye-bo-rnams-kyis bzuh-ño/

而して、かかれは諸愚夫異生によつて執られた。

mayā sattvañ parimocitah (Vajra. XXV.) : ñas sems-can-rnams bkrol-lo

われによつて諸有情は度せられた。

とある如く、チベット譯はすべて過去形が用ひられてゐる。その過去形は能動態の過去形と同一のものが多い。

ハ、受動の未來

最後に、受動の未來についての考察が残つてゐる。

佛典梵語に於て、受動の未來をあらはすときは、未來受動分詞（義務分詞）の形を用ひてゐることが大多數を占めてゐる。それに對するチベット譯は如何なる活用形の動詞を以て譯してゐるかを對照してみると次の如くである。

evan draṣṭavyaṁ sanskṛitam / (Vajra: XXXII) : ḥdus-byas de ltar blta-bar bya /

有爲はかくの如く見られるべきである。

dharmā eva prahātavyāḥ (Vajra. VI) : chos-rnams kyan spaii-bar bya

諸法さへも捨てられるべきである。

vistaraṇa gṛaṇīyam / (Koṇa-vyā. II) : rgyas-par brtsi-bar byaḥo / (Koṇa. II.)

廣く數へられるべきである。

na.....puṇya-skandhaḥ parigrahitavyaḥ / (Vajra. XXVIII.)

bsod-nams-kyi phuṁ-po yois-su gzun-bar mi byaḥo /

福聚は攝受せられるべきでない。

evam anena ḥṛṣītavyam / (Abhisamaya. II) : ḥdis de ltar bslab-par byaḥo /

彼によつてそのやうに學ばれるべきである。

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

以上の對照によつて直ちに知られる如く、チベット譯の動詞の活用形は從來の辭書に未來形として出されてゐる形であり、それを不定法として *bya* なる助動詞を伴はしめたものである。それは、既に述べた受動の現在の場合の形式と全く同じである。

また、先の受動の現在の場合に、必ずしも *bya* なる助動詞を必要としないことを用例をあげて立證したが、いま受動の未來の場合も同じである。例へば、名詞的用法であるが、

grāhaka (能取) : grāhya (所取)

ḥdzin-pa : gzun-pa

kāraṇa (能作) : kārya (所作) (Mv. 4583.)

byed-pa : bya-ba

ādhāra (能持) : ādheya (所持) (Mach. X.)

rten-pa : brten-pa

といふ如く、能・所の關係の語が佛典によく用ひられ、その所をあらはす方の譯語に於て明瞭である。また、文章に於ける動詞としての用法を拾へば、

lakṣaṇa-alakṣaṇatas tathāgato draṣṭavyaṅ / (Vajra. V.)

de-bshin-gyegs-pa-la mtshan dan/ mtshan med-par bñaho/

相・非相として如來は見られるべきである。

といふ用例は、チベット譯では「……如來を見るべきである」と意譯されてゐるが、*draṣṭavya* といふ未來受動分

詞に對して *bta* なる活用形を當ててゐると考へて間違ひないであらう。これと同じ *bta* なる譯語例は、能斷金剛般若經の他の個所にも見られるし、また阿毘達磨集論やその他の佛典のチベット譯にも多く見られる。また、

udgrahitavyo nādharmāḥ / (Vajra. VI.)

chos ma yin-pa yañ mi gzun-pa[ñi phyr-ro]

非法をも執られるべきでない、[故に。]

といふやうに、助動詞を伴はないことが時々あるのである。

要するに受動の未來は、助動詞の有無にかかはらず、從來の辭書に未來形として出されてゐる活用形を以てあらはされるのである。それは、あたかも先の受動の現在の場合とすべて全く同じである。既に受動の現在について述べた際に、從來の辭書に未來形と稱する活用形を受動態の現在形と呼んだ方が適切であるといつたが、その活用形は更に受動態の未來形をも兼ねるから、「受動態の現在・未來形」と名づけた方がなほ一層適切であらう。能動に於て、現在と未來とが同じ現在形を以てせられてゐることを既に述べたが、受動に於ても同様であることを發見する。能動を述べた際に、チベット人は現在と未來との區別の念が薄弱ではなからうかといつたが、受動に於ても同様であるから一層その感を強くするのである。

註① *Si-tuñi sun-rtags* (Chandra Das: An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language. Darjeeling, 1915 に所收) pp. 48 最下行—50, 52.

五、活用動詞の活用の仕方

上來、佛典に於ける能動の三時と受動の三時に對するチベット語活用動詞の用法を述べ了つた。

そこで今度は、佛典に於て、一つのチベット語活用動詞が能動の三時と受動の三時に如何なる活用をするかを調査して、佛典を読むための活用表を作らうと思ふ。さういふ活用表は、佛典を正しく讀むために是非とも必要なものとなるであらうからである。といつても、すべての活用動詞について詳しく検討することは不可能に近いから、いまは各形態のものについて代表的な活用を一つづつあげることとする。

(1) ○——形 (例 1) sreg-pa (√dan) 燒く

〔能・現〕 indhanam agnir dahati (Mādh. X.): mes bud-ciñ sreg-go

火が薪を燒く。

〔能・過〕 用例を未だ見出さない。従來の辭書に示す如く (b)sregs であらう。

〔能・米〕 apṛāpi na dhaksyati (Mādh. X.): phrad med-na/ sreg-par mi hgyur
會坐せざるときは燒かないであらう。

〔受・現〕 bsreg-byaṇi bud-ciñ / (Si-tu. p. 50. 受動の用例中)

燒かれる薪 (梵語に直せば dāhya-indhanam となつて未來受動であるが、Si-tu は恐らくチベット語として受動の現在の意に用ひてあるのであらう。)

〔受・過〕 dagdha-adagdha (Mādh. X.): bsregs dan ma bsregs

已に曉けたるものと未だ曉けざるものと

〔受・未〕 dānya-lakṣaṇa indhananī / (Mādh. X.)

bsreg-par bya-baḥi mtsan-nīd-can-ni bud-ḡiṇ yin-la /

曉めおれる相のあるのが薪である。

前述の如く、現在形と未来形は同じであるから、合して、以上の用例によつて次の活用表ができるであらう。

(以下、活用表に於て pa, ba を除く。)

現在・未来		過	去
能	動	sreg	(b)sregs
受	動	bsreg	bsregs

(2) ○*r*——形 ○*l*——形 ○*s*——形

(例 2) lta-ba (√*dir*ḡ) 見る

〔能・現〕 darḡananī rūpanī na paḡyati.....(Mādh. III.): lta-ba gzuḡs-la mi lta-ba.....

能見が色を見ない.....

ḡūnyān vyavajokayati (Hṛidayā.): stoṇ-par rnam-par ltaḡo / 空であると照見する。

〔能・過〕 miḡ-gis bltas / (Si-tu. p. 47. 過去の用例中) 目で以て見た。

〔能・未〕 darḡananī parān eva draḡsyati.....(Mādh. III.): lta-ba [yaṇḡ] gshan kḡo-na-la lta.....

能見は他のものを見ることがあらう.....

〔受・現〕 blta byaḥi gzuḡs/ (Si-tu. p. 49. 受動の用例中)

所見の色(梵語としては未來受動となるが、Si-tu はチベット語として受動の現在の意に用ひてゐるのであらう。)

〔受・過〕 dirṣṭa-adirṣṭa (Madh. III.): bltas dan ma bltas

已に見られたると未だ見れざると

〔受・未〕 lakṣaṇa-alakṣaṇatas tathāgato draṣṭavyaḥ (Vairo. V.)

de-bshin-gḡeḡs-pa-la mtshan dan/ mtshan med-par bltaḥo/

相・非相として如來は見られるべきである。(藏譯:……如來を見るべきである。)

以上によつて次の活用表ができる。

	現在・未來	過去
能 動	lta	bltas
受 動	blta	bltas
(3) b—形	g—形	d—形 m—形

(例 3) gsun-ba 説きたまふ(敬語)

〔能・現〕 從來の辭書が示す gsun-ba で誤らないであらう。

〔能・過〕 從來の辭書が示す gsuns(-pa) で誤らないであらう。

〔受・現〕 abhidharma ucyate,……iti/ (Madh. III.): chos mñion-pa-las,……shes gsuns-so/

阿毘達磨の中に……と説かれてゐる。(この gsuns は能動の過去形を以て意譯したのかもわからない。)

〔受・過〕 *sūtre 'py uktaṃ.....[ti]* (Kṛoṇa-vyā. II.) : mdo-las kyan/.....shes gsuṅs-so/
 また經の中に……と説きたまふた。

tañāgatena bhāṣitā.....(Vajra. V.) : de bshin gcegs-pas.....gsuṅs-pa
 如來によつて説きたまふた……

以上用例は少いが、次の活用表ができるであらう。

	現在・未來	過 去
能 動	<i>gsuñ</i>	<i>gsuṅs</i>
受 動	<i>gsuṅs(?)</i>	<i>gsuṅs</i>

(4) *ñ*——形 (例 4) *ñdzin-pa* 執る

〔能・現〕 *āyatyāṃ sainvaram āpadyate* (Mv. 1632.) : *phyis sdom-pa ñdzin-pa*
 將來に對して戒禁を加ふ。

〔能・過〕 *lag-pas ñzuñ/* (Si-tu. p. 48. 過去の用例中) 手で取つた。

〔能・未〕 *imain dharma-paryāyam.....dhārayiṣyanti* (Vajra. XIV.)
chos rnam-graṅs ñdi.....ñdzin-pa

この法門を持つるであらう。

〔受・現〕 *grñhyate : gzuñ-ño, gzuñ[-ba]* (Nyāyabindu, INDEX) 執られる。

〔受・過〕 *sa ca bāla-piṭhag-janair udgrñhitaḥ* (Vajra. XXIV.)

de yañ byis-pa so-soḥi skye-bo-rnams-kyis bzuñ-ño/

而してかぢは諸愚夫異生によつて執られた。

〔受・米〕 udgrahitavyo nādharmah/ (Vajra. VI)

chos ma yin-pa yañ mi gzun-ba[hi phyir-ro/]

非法をも執られるべきでない〔故に。〕

以上によつて、次の活用表ができる。

	現在・未來	過 去
能 動	ñdzin	bzuñ
受 動	gzun	bzuñ

以上は、佛典に屢々用ひられる代表的なものの活用を列擧したのであるが、佛典を読むための活用表なるものが、このやうに作られてよいであらう。

ここに注意しなければならないことは、自動的な意味を有する動詞についての活用である。例へば、ñgro-ba (行く) といふ自動詞は梵語の gam なる語根より來た動詞に當てられる。梵語に於ては自動詞と雖も受動形があつて、そのチベット譯を見るべし。

tasmāḍ gamyamānam eva ganyata iti/ eko 'tra gamir jñānārthaḥ aparāḥ ca deḡantara-saṅprāpty-artha iti/ (Mād. II.)

deḡi phyir bgom-pa kho-na-la ñgro-ba yod-do/ ñdir ñgro-ba gcig-ni ḡes-paḥi don yin-la/ gshan-ni

yul gshan-du phyin-paḥi don yin-no shes-bya-baḥo/

それ故に、去の現に行はれてゐる處にこそ去ることがある。この場合、一には *√gam* の語は「知ること」の意味であり、また他には「*√gam* は」余の方處に到達すること」の意味であると。

gatain na gamyate.....gamyamānain na gamyate/ (Madh. II. 第1偈)

soḥ-la mi ḥgro-ste/.....bgom-pa ces-par mi ḥgyur-ro/

已に去りたることに於けることはあらず。……去の現に行はるるものは知られず。

とあつて、受動形 *gamyate* は *ḥgro-ba* と譯せられるか否かは *ces-pa* と意譯せられてゐる。 *ces-pa* と意譯せられる理由はこの二つの中の前の用例に示されてゐて、この二つの問題ではない。そして *ḥgro-ba* というのは能動の現在形と考へねばならない。何故に能動で譯したのであらうか。それは梵語は受動形であるけれども、自動詞の場合は受動の意味を有しないからであらう。また過去受動分詞 *gata* は *son* と譯せられてゐる。 *gam* 以外の例をもう一つ示せば、

kṣema-prāpta (Madh. VI.): *bde-bar son-pa* 安穩に到達せる

といふやうに *prāpta* を *son-pa* と譯してゐる。これらの梵語の過去受動分詞は、自動詞であるから受動の意味は無い。故に *son* や *son* なるチベット譯語は能動の過去形であると考へるべきであらう。したがつて、チベット語としては、自動詞の受動には活用形が無いと見做すのが適當であらう。なほまた、未來受動分詞 *gantavya* (所去・去るべき) に對して *bgrod-pa* 或は *bgrod-par-bya* (Madh. III.) といふ譯語を與へてゐるのは些か注意をひかれる。この語は *ḥgro-ba* と語根を同じくするものであつて、特に未來受動なることを表現しようとして用ひられてゐるの

であらう。しかし、どの自動詞にもこのやうな形の語があるとは思へない。恐らく特殊な例であらう。更に、チベット語の動詞の中で、自動詞的な獨特な用法があるやうであるから、今後の研究課題に譲ることにし、いまは一應これでとどめる。

六、活用動詞の分類

佛典の梵藏對照研究により、それに用ひられてゐるチベット語活用動詞の活用を知ることができ、新たな活用表を作るべきことを述べた。このやうにして全部の活用動詞に互つてその活用表ができるわけであり、わたくしは、不備ながらも本稿の附録にそれを作つて附加することにした。

さて、如何なる言語の動詞も不規則に活用するものではない。そこに幾つかの活用法則が見つけられてゐるのが常である。佛典チベット語の活用動詞に於ても同様であるに相違ない。そこで全部の活用動詞の現在形を中心として、すべての活用形式を列擧し、その中に共通點を見出して幾種類かの形式にまとめようと思ふ。いま、できるだけ簡明に述べてゆくことにする。(以下、活用表に於て pa, ba を除く。)

(1) ○——形

a) 基本子音で始まる動詞。但し基本子音が摩擦音である動詞の約半數を除く。

能:現,未	能:過	受:現,未	受:過
○——	○—s	○——	○—s
byed なす	byas	bya	byas

myon 領受する myais myan myais

b) 摩擦音の基本子音で始まる動詞の中の約半数。

○摩—— (b)摩—s b摩—— b摩—s

sreg 焼く (b)sregs bsreg bsregs (前節に述べた例 1 を参照)

ɣu 除去する (b)ɣus bɣu bɣus

(2) ○r——形 ○l——形 ○s——形

a) 基本子音が有頭で始まる動詞。但し基本子音が唇音である動詞を除く。

能: 現, 未 能: 過 受: 現, 未 受: 過

○r—— br—s br—— br—s

○l—— bl—s bl—— bl—s

○s—— bs—s bs—— bs—s

rijod 認く brjod brjod (終子音 d は -s をとることがない。)

lta 見る bltas blta bltas (前節に述べた例 2 を参照)

sgrub成就する bsgrubs bsgrub bsgrubs

b) 唇音の基本子音が有頭で始まる動詞。

基本子音が有頭で始まる動詞は上記 a が原則的な形式である。しかし、この際に基本子音が唇音であるときは、Thon-mi の性入法第 8 偶に示されてある如く、同じ唇音の添前子音 b- をとらないから、この形式があるわけである。但し、

○l 唇——形の語は存在しない。

○r 唇—— ○r 唇—s ○r 唇—— ○r 唇—s

○s 唇—— ○s 唇—s ○s 唇—— ○s 唇—s

spoñ 捨する spans span spans

例外として、有頭の s が落ちるものがある。しかしこの例は他に無い。

shyin 興へる byin shyin byin (終子音 n は -s をとることがない)

また、上記 a の例外として、この形式の中に入るものがある。しかしこれも極めて少数である。

skye 生ずる skyes ——(?) (skyes)(?)

(3) b——形 g——形 d——形 m——形

a) これらの形の全部。但し g——形の一部分を除く。

能: 現, 未 能: 過 受: 現, 未 受: 過

b—— b—s b—— b—s

g—— g—s g—— g—s

d—— d—s d—— d—s

m—— m—s m—— m—s

bgod 分ける bgos bgod 分ける bgos

gsuñ 脱きたまふ gsuñs gsuñs (?) gsuñs (前節に述べた例 3 を参照)

dpyod 考察する	dpyad	dpyad (終子音 d は -s をとることがない)
mñed 擦る	mñes	mñe

b) g——形の一部。

g——	b——	g——	b——
gtoñ 興へる	btañ	gtañ	btañ
gcod 切る	bcad	gcad	bcad

(4) ħ——形

a) ħ——形にして、活用しても ħ- を有する動詞。

能: 現, 未

能: 過

受: 現, 未

受: 過

ħ——	ħ—s	——, ħ——	ħ—s
-----	-----	---------	-----

ħgag 減する	ħgags	——	ħgags
----------	-------	----	-------

ħphañ 擦ぜうつ	ħphañs	ħphañ	ħphañs
------------	--------	-------	--------

b) ħ——形にして、活用で ħ- を落す動詞。

ħ——	○—(s)	——, ○——(?)	○—(s)
-----	-------	------------	-------

ħgrub 成試する	grub	——	grub
------------	------	----	------

ħthob 得る	thob	thob	thob
----------	------	------	------

c) ħ——形にして、活用で ħ- が他の添前子音に變る動詞。

佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究

h—	b—s	b—	b—s
h—	b—	g—	b—
h—	b—	d—	b—
h唇—	○唇—	d唇—	○唇—

この中、第3番目の形式が唇音の基本子音であるとき、Thon-mi の性入法第8偈に示されてゐる如く、同じ唇音の添前子音 b- をとらないから、第4番目の形式があるわけである。故に第4番目の形式は第3番目の形式の特殊な場合である。第1,2番目の形式に於ては、b- や g- は唇音と結合しないから、第4番目のやうな形式は出てこないわけである。

hcad 説く、釋す	bcad	bcad	bcad (終子音 d は -s をとることがない)
hdzin 執る	bzuñ	gzuñ	bzuñ (前節に述べた例4を参照)
hrol 解脱する	bkröl	dgröl	bkröl
hbyin 出す	phyuñ	dbyuñ	phyuñ

例外として、第2,3番目の形式に於て過去形が b- をとらず夫々 g, d- をとることがある。しかし僅少である。

bdom(s) 訓誨する	gdams	gdam	gdams
bhrol 音楽を奏する	dkrol	dkrol	dkrol

以上述べたところによつて、——極めて少數の例外はあるが——すべての活用動詞の各種形式を列挙したつた。活用動詞は總數約六六一あるが、それらの動詞はどれかの形式——或は少數の例外——に屬することが明瞭になつたことと思ふ。

さてそこで、これらの各種活用形式を綜合して通觀するならば、大きく二種類に分けることができるであらう。そ

の二種類を、先に拙著「チベット語古典文法學」(一三九頁)に於て、第一種動詞と第二種動詞といふ名稱をつけたから、ここでも同じ呼び方をしよう。

第一種動詞——添前子音を變へない活用動詞。活用を通じて添前子音を全然とらない動詞を含む。

第二種動詞——添前子音を變へる活用動詞。活用を通じて添前子音をとつたりとらなかつたりする動詞を含む。

この二分類に、先の各種活用形式をそれぞれ所屬せしめるならば、次の如くなるであらう。ついでに、各種形式に略號を設け、附録の活用表の各動詞にそれを附けることにした。略號のローマ字は能動現在形の添前子音及び有頭子音をあらはし、添前子音なきものはoとする。1・2の數字は第一種・第二種を示す。數字の次のローマ字はr——形に於て受動現在形の添前子音をあらはし、過去形に於て添前子音なきものをoとする。

活用動詞總數 661 語、

248 語、及び例外12語

(1) 第1種動詞

略號	能:現,未	能:過	受:現,未	受:過	
o 1	○——	○—s	○——	○—s	56語
or 1	○r唇—	○r唇—s	○r唇—	○r唇—s	6語, 例外3語
os 1	○s唇—	○s唇—s	○s唇—	○s唇—s	33語, 例外8
b 1	b——	b—s	b——	b—s	51語
g 1	g——	g—s	g——	g—s	27語
d 1	d——	d—s	d——	d—s	13語
m 1	m——	m—s	m——	m—s	6語, 例外1
h 1	h——	h—s	——, h——	h—s	56語

(2) 第2種動詞

437語、及び例外14語

略號	能：現, 未	能：過	受：現, 未	受：過	
o 2	○摩——	(b)摩—s	b摩——	b摩—s	40語, 例外1
or 2	○r——	b _r —s	b _r ——	b _r —s	49語, 例外2
ol 2	○l——	bl—s	bl——	bl—s	9語, 例外1
os 2	○s——	bs—s	bs——	bs—s	107語, 例外1
g 2	g——	b——	g——	b——	15語, 例外3
h 2	h——	○—(s)	——, ○—(?)	○—(s)	90語
h 2b	h——	b—s	b——	b—s	44語, 例外1
h 2g	h——	b——	g——	b——	26語, 例外4
h 2d	h——	b——	d——	b——	12語, 例外1
h 2do	h唇——	○唇——	d唇——	○唇——	18語

活用不明のため上記の何れの形式に所屬せしめるべきかがわからないもの。

27語

〔その他 命令形のみ活用を有するもの。〕

〔16語〕

(注意)

① 1語で2形式以上の活用を有するものがあるから、總數661語と上表の合計とは合致しない。

② 以上の表の中、-sは添接しうる場合に限つて用ひられる。故に-sを記してあつても必ずしもそれをもつてゐるとはいへない。

七、Thon-mi 文法的重要性

さてここで、最初に述べた Thon-mi の文法にもどらねばならない。性入法第二——第一五偈の所説は、われわれが梵藏佛典の對照によつて得たすぐ前の活用形式の表と比べて見るならば、如何なる結果になるであらうか。

先づ、第二——第一四偈に説くところは、第一種動詞の活用と一致しないことは一見して明瞭である。ところが第二種動詞の活用と比べると、驚くべきことには、一つの相異もなく全く一致するのである。その一致の状態を詳しくここに述べることは重複することになるから省略するが、最非とも「一、Thon-mi 文法の所説」を見直して第二種動詞の活用と照合していただきたい。

次に、第一五偈の所説は、添前字 *m-* について述べたものである。*m-* は第二種動詞の中には用ひられない。この所説は、第一種動詞の中の *m1* 形式に一致する。

すなはち、Thon-mi の所説の對象は、第二種動詞の活用であるといふことができる。そして第二種動詞の中には *B*——形が存在しないから、*m-* についてだけは第一種動詞の中の唯一の *m1* 形式をその對象に加へたと考へられる。

次に、Thon-mi の性入法第二五偈に對する諸註釋者たちの所説、すなはち後へ添接する *-s* が過去をあらはすと註釋するのは、以上の第一種と第二種全部の動詞の活用を見れば一目瞭然に實證されうるであらう。

それでは、Thon-mi は、添前字に關しては何故に第一種動詞を所説の對象としなかつたのであらうか。思ふに、第一種動詞はその活用形式を一見して明白である如く、活用の無い動詞に近く、添前字が三時二動をあらはすとはい

へないから、それを除外したのであらう。そして活用動詞の中、約三分の二を占める第二種動詞を専ら對象としたのであらう。

このやうに、佛典に於けるチベット語動詞の用法を研究してゆくならば、Thon-mi 文法の所説は、Durr 氏によつて酷評せられてゐるけれども、誤りを犯してゐるとはいへない。むしろ、わたくしは Thon-mi 文法の正確さに驚異の念を禁じ得ないのである。すなはち、Thon-mi 文法はわれわれに何らかの重要な意味を示唆してゐると思ふのである。

八、Thon-mi 文法の示す意義

佛典に用ひられてゐるチベット語の活用動詞は梵語原文と對照して特別に考慮せられねばならないといふことと、その結果得た第二種動詞の活用形態が Thon-mi 文法の所説と一致するといふことを述べた。わたくしは佛典に用ひられてゐる事實に根據を置いて論述を進めたつもりであるから、恐らく誰にでも承認してもらへると思ふ。もし是認してもらへれば、ここに本論文を草した所期の目的は達せられたのである。それであるから、もはや筆を擱くべきであるが、しかし Thon-mi 文法が何らかの重要な意義をもつものであることがわかつたのであるから、更に、どのやうな意義を有するかをつきつめてみたいといふ志向に驅られざるをえない。ところが、そこへ歩を進めることは、事實を越えた範圍へ入ることになり、それがためには多少とも一般言語學の事項に觸れざるを得ないから、聊かわたくしの専攻外になる恐れがある。したがつて却つて蛇足となるかもしれないが、學界で今後の研究課題

の一端にしていたきたいといふ意味で、一應わたくしの考へを述べてみたい。

さてそこで、われわれは再び *Thon-mi* 文法の所説にもとつて、かれの性入法第二四偈の「他なるもの」(*gshan*)と第一四偈の「自なるもの」(*bdag*)といふ意味を再検討しよう。

先づ「自なるもの」とは、添前字 *h* について名づけたものである。この *h* について第二種動詞の活用形式を見ると、能動の現在・未來のみに附加せられてゐることがわかる。このことを *Thon-mi* は第一四偈にうたつたのであることは明白である。しからば、なぜ *h* がそのやうな意義に用ひられるのであらうか。それについて *Chandra Das* の藏英辭典を見ると、*ha* に關して説明してゐる中に、

a phonetical form of *ha*, thus *ha-cag*=*ha-cag* we; v. also *hu-cag*. (*Das*, p. 1114)

(*ha* は) *ha* (わたくし) の音聲上の一形式。それ故に *ha-cag*=*ha-cag* われわれ; また *hu-cag* を見よ。

とあり、また *hu-cag* の下を見るよ、

pers. pron. we; also ho-cag. ho-cog, hu-bu-cag. (*Das*, p. 1115)

人稱代名詞われわれ; また〔同義語として〕*ho-cag, ho-cog, hu-bu-cag*。

と述べられてゐる。念のため *Jäschke* の藏英辭典(四九九頁)を調べても、少し簡單であるが、同様の説明が施されてゐる。すなはち、*ha, ho, hu* は *ha* (わたくし) と同様に第一人稱代名詞である。ところで、添前字 *h* は古くは *a* か或は他の半母音として、動詞の前に位置して、第一人稱を意味する獨立の一語として用ひられてゐたのでなからうか。そして、*h*——形第二種動詞は、本來は「わたくしは……する」といふことを意味した。それが *Thon-mi* が文字で書寫した時代には、*h* が音を消失しつつある傾向にあつたので、かれは添前字として動詞の前にくつつけてし

まつたと考へてはいけなからうか。このやうに、*h*-は第一人稱をあらはすならば、延いては人稱だけでなく「自己」を意味し、能動の文の主格からいつて主格自身が動作することになるから、本論の一に述べた如く *Bacot* 氏が *Le subjectif* (主格的なるもの) と説明してゐるのに合致してくる。それを近代の文法用語で言ひ換へれば能動態といふことになる。或は *h*-を有する動詞を自動詞といつてよい場合もあるであらう。もしこの考へ方が成り立つならば、*h*-形の状態で受動に用ひられることはありえない筈である。實際、*Thon-mi* が所説の對象としてゐる第二種動詞では、直ぐ前に掲げた活用形式の表で明瞭なやうに、*h*-を有する受動形は原則として存在しない。受動形は添前子音を變へるか或はそれを落してゐるのが常である。ちなみに、*Thon-mi* の對象としない第一種動詞及び活用の無い動詞には *h*-を有する受動形の動詞は存在する。その *h*-は異つた面から探究せられねばならないであらう。しかしそれにしても、佛典を読むとき、“*h*—*par bya*” といふ表現を以て受動を意味してゐる場合(受動を意味してゐないことがある)は稀である。例へば、中論などのチベット譯を見ていただいても、そのやうな用例を見出すことは少し容易ではない程である。

次に「他なるもの」(*gshan*) とは、「自なるもの」に對して名づけられたものであらう。それは第一二偈に説く *b*-を指してゐるのである。*b*-は、第二種動詞の活用形式を見ると、受動の三時と能動の過去との大部分を占めてゐる。このことは第一二偈に説く通りである。そこで先づ受動についてであるが、この *b*-も恐らく嘗ては受動を意味する獨立的な要素であつたのではなからうか。わたくしは、少々飛躍的ではあるが、同じ受動を意味する中國語の「被」とその祖語に於て何らかの關聯があるのであるのではないかと推測するのである。ところが、過去については、その本來の本質がわからない。受動なるが故に過去をも意味するといへないこともないが、今後の研究に俟つことにする。

次に第一三偈に説く *g*-と *d*-について第二種動詞の活用形式を見ると、能動・受動の現在・未來に用ひられることがわかる。この *g*-と *d*-とは兩者が殆んど同じ用法を有してゐるといふ特色を持つてゐる。だから *Thon-mi* は第一三偈に兩者をまとめて説いたのであらう。そして、能動にも受動にも用ひられるといふことは、反面より考へればどちらをも表示しないもの、すなはち能動・受動とは全く別な意味を持つた要素であらう。

最後に、第二五偈に對して諸註釋者たちが補足してゐる *-s* について、第一・第二種動詞全部の活用形式を見れば、過去を意味することは明白である。この *-s* に關して、西田龍雄氏が、日本西藏學會の研究發表（昭和二十九年六月二十六日大谷大學に於て開催）の際に發表せられたところによると、それは完了を意味する獨立的な要素であり、中國語の「已」とその祖語に於て何らかの關聯があるものであらうといふ結論であつた。その說に對して、わたくしは賛意を表するものであり、いづれ氏は何らかの形で公刊せられるであらうから、ここには省略する。

以上、要するに、主として第二種動詞に於ける前後に添接される子音は獨立した要素であつて、あたかも中國語に似たところがある。近代の研究によつてチベット語は孤立語の中へ屬せられるべきものであるといふ說が有力となつてゐる。孤立語であるといふ點からいつて、このやうな考へ方は許されてよいと思ふ。例へば、

phcad (能動の現・未) 能説

bcad (受動の現・未) 被説

btas (受動の過去) 被見已

と對應することになる。そして中國語の綴りの如く、正しくは添接子音は綴りを獨立して書かれるべきであつた。しかるに、*Thon-mi* の時代に獨立した要素としての音を失ひつつあつたので、*Thon-mi* がインドへ行つて文法を學び、屈折語である梵語の影響をうけて、一綴りとして書き、あたかも梵語の動詞の如き變化を有するもののやうに制定してしまつたと想像せられる。したがつて、チベット語の動詞は變化を有しないものであるといはねばならない。

チベット語と親縁關係にある中國語やビルマ語やカチン語などが、動詞に三時の變化が無い點からいつても、獨りチベット語の動詞のみに變化があるといふのは理解に苦しむところである。

ところが、チベット語の動詞は變化しないのであらうといったが、それでは前述の *hchad* は *bcad* といふやうに語根の基本子音を變化するではないかといふ疑問が生ずる。しかしよく些細に検討すると、*ch* と *c* は同じく口蓋音である。このやうに基本子音を變化するものは殆んどすべて同音群中に於て變化するのであつて、前へ添接せられる *h*-と連聲したものと考へられ、動詞そのものの變化とはいへないと思ふ。その連聲について説いたものが、性入法第五偈——第八偈であると思ふのである。

む す び

以上述べてきたところを概観すると、前後に添接せられる子音に重點が指向され、動詞の語根には何ら言及せずにとつてしまつた。その原因は *Thon-mi* 文法の意義を見直すといふ一つの目的のために、*Thon-mi* 文法が添接子音のみについて述べてゐるから、自らさういふことになつた。Durr 氏は、最初に述べた如く、動詞は語根を中心として研究せねばならないのに、古典文法家たちは添接子音の解説のみにとつてゐるのは誤りであると指摘した。確かに一般の言語に於てはそれが正しい。しかし、チベット語は孤立語であつて動詞は變化せず、概して語根の考察をそれ程必要としない。殊にチベット語佛典を読むためには何らその考察を要求されない。それがために、語根の研究に觸れないことにした。しかし言語學としての研究といふことになれば別問題である。また、活用の無い動詞及び第一

種活用動詞にあつては、上述の考へ方だけで解決はできない。その解決には Woffenden 氏の如きチベット・ビルマ系同語族語の比較對照研究が必要となるであらう。また中國語との研究も行はれなければならないであらう。また第二種動詞も語根から研究せられて、同じ語根である第一種動詞や活用の無い動詞も綜合して組織し直す必要がある。さういふ研究には Dur 氏の行つた方法を採用せねばならない。Dur 氏のその方法はわれわれに有益な參考となるものである。このやうにチベット語研究とても種々の分野が展開せられる。わたくしがここに述べようとしたのは、佛典に用ひられてゐるチベット語動詞の用法といふ分野に限定したわけである。

さて、上來論述したやうに、チベット語の動詞は變化しないものであるならば、變化といふ言葉を避けるべきであるから「活用」と呼んで來た。しかし活用といふのは、國文法に於て古くから用ひられた用語であつて、今なほそれを踏襲してゐるだけで變化といふのと何ら相異が無いそうである。相異が無いのであれば活用といつても無意味ではあるが、幾分でも變化を有しないことを意識できれば幸であると思つてさう名づけることにした。したがつて、また動詞の活用表を作ることも理に合しないことになる。佛典に用ひられてゐる動詞の活用は、Thon-mi 文法の所説と全く一致するのであるから、それを理解すれば事足りる道理である。しかしながら、それにしては母音の變化もあつて活用が複雑であるから、便宜上からして活用表が必要であらう。故に未だ不明の個處や不備な點が多くて草案の域を出ないけれども、附録に活用表を附けることにした。

最後に、何故に佛典に於ける動詞の活用と Thon-mi の所説とが一致してゐるのであらうか。思ふに Thon-mi がその當時のチベット語を文法として組織したものを、後に佛典を翻譯する際に基準として人工的に譯語を作つたからであらう。或は Thon-mi が作つたと傳える文法は、實は佛典翻譯の盛んな頃に譯語を作る基準として編纂せられた

もので、それを *Thon-mi* に歸したのかもわからない。しかしわたくしは前者を採るものである。といふのは *Thon-mi* はインドへ行つて極めて發達した文法學を學んでゐるから充分文法を著作しえたことと、*Thon-mi* の文法は第八世紀や第九世紀初頃のチベット語よりも古いものをわれわれに示唆してゐるといふこととの二つの理由からである。といつても、*Thon-mi* が作つたものがそのまま現存してゐるとは言へないであらう。恐らく現存の文法に近い原形のものを作つたのであらう。とにかく佛典のチベット語は人工語として梵語の影響が他の言語に見られない程多いと考へねばならない。けれども、チベット語は梵語ではないのであるから、チベットの古典に溯らねばならないとしたのが *Bacot* 氏である。チベット語獨自のものを言語學的に究明しなければならない。^④これは卓見であることは申すまでもない。しかし、佛典のチベット語は原文が梵語であり、その翻譯の基準が *Thon-mi* 文法であるから、この關係をなほざりにしてはならない。*Durr* 氏は *Bacot* 氏の方法を繼承してはゐるが、*Thon-mi* 文法のこの關係に留意しなかつたのは遺憾なことである。とまれ、佛典に用ひられてゐるチベット語は、梵語との對照をゆるがせにしては論ずることはできないのである。

註① *Wolfenden: Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology. London, 1929. 參照。*

② 詳しくは拙著前掲書一〇頁以下參照。

③ 古いものを示唆してゐるとは、例へば前節で述べた如く *Thon-mi* 文法に前後添接子音の意味を説いてゐることが、古いチベット語ではそれら子音が獨立的な要素であつたことを示すものであることを指す。

④ 山口益「フランス佛教學の五十年」二二頁參照。

附 録

活 用 動 詞 の 活 用 表

は し が き

1. この活用表は佛典を読むために作ったものであつて、言語學的究明を行ふためのものではない。
2. 未だ不明の個處や不備な點が多く、誤りもあるであらうから、これは草案の域を出ないものである。
3. 自動詞の場合に、チベット語としては受動形が無いと考へるべきであらう。梵語では自動詞と雖も受動形があるが、しかしそれは受動の義を有しないから、それに對するチベット譯語は能動形を以て當てられてゐると思はれる。故に梵語の自動詞の受動形に相當するものは、この表では能動形の欄を見ていただきたい。
4. 命令形に關しては未だ研究に着手してゐない。この表に掲げた命令形は Jäschke 及び Das の辭書に従ふ。空白は不明をあらはすが、恐らく能動の現在形を用ひるのであらう。
5. 同一語根から來たと思はれる語で、ほぼ同じ意味に有する語を備考欄に Cf. として出した。或る活用形を缺いてゐる語は、その缺いてゐる活用形の意味を表現しようとするときは、Cf. として出した語のそれに相當する活用形を用ひる場合が多い。併せて參考とせられたい。
6. 活用形が、Jäschke と Das の辭書に無いか又は相異してゐる場合のみに限つて、Si-tu 文法書と Mahāvyutpatti に見出しうる典據を備考欄に出した。その他の多くの佛典に於ける典據は繁を恐れてすべて省略した。また極めて明瞭なものも省略した。それらの典據や用例は、改めて別な形式で發表したいと豫定してゐる。

略 語

—	活用形無し.	?	疑問、不明.	=	に等し.
命.	命令形.	外	例外.	稀	稀に用ひる.

I. II. 二義あつて活用を異にするもの.

() 未だ立證できないが、恐らく有りうと思はれる活用形.

() 有つても無くてもよいもの.

() チベット語獨特の自動詞的用法の語に於て、チベット語としては受動に用ひないであらうと思はれるが、梵語の受動の譯語に用ひられる活用形.

J. Jäschke, H. A.: A Tibetan-English Dictionary. London, 1881.

D. Das, S. C.: A Tibetan-English Dictionary. Calcutta, 1902,

S. Si-tu: Si-tuḥi Sum-rtags (Das: チベット語文法書所収本). 數字はその頁數.

M. Mahāvyutpatti (轉本). 數字はその番號.

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 未	在 來	過 去	現 未	在 來	過 去		
o 1	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪		
o 1	𑖀𑖄𑖪	{	𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪(𑖪)	命に, J. は 𑖀𑖄𑖪𑖪 を加へる.
o 2外			𑖀𑖄𑖪𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪𑖪		
d 1	𑖀𑖄𑖪*		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪*		𑖀𑖄𑖪𑖪		S. 52.
d 1	𑖀𑖄𑖪*		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪*		𑖀𑖄𑖪𑖪**		*S. 52; **M. 2443.
d 1	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*		= 𑖀𑖄𑖪𑖪; Cf. 𑖀𑖄𑖪𑖪; *M. 6819, 5339.
b 1	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪		*S. 47.
b 1	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪		Cf. 𑖀𑖄𑖪𑖪; *S. 47.
b 1	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪**		𑖀𑖄𑖪𑖪		*S. 47; **S. 49.
b 2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*		Cf. 𑖀𑖄𑖪, 𑖀𑖄𑖪𑖪; *M. 6057.
or2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪	*S. 47.
or2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪	*S. 47.
or2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪(𑖪)*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪(𑖪)**		= 𑖀𑖄𑖪𑖪; *S. 47; **M. 721.
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪	
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪		
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪(𑖪)	Cf. 𑖀𑖄𑖪𑖪
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪	
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪*		𑖀𑖄𑖪𑖪		*S. 49.
os2	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪*	𑖀𑖄𑖪		𑖀𑖄𑖪𑖪	𑖀𑖄𑖪𑖪	*S. 47.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
os2	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	
os2	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་(ས)	Cf. བཞིངས, བགོངས
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་		
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་*		Cf. བཞིར ; *M. 6068.
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་*		Cf. བཞིལ I. ; *M. 7161.
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་		Cf. མྱོད་
os2	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་		Cf. མྱོད་
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་		
os1外	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་(?)	མྱོད་*		*M. 8627.
os2	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་	མྱོད་མ	མྱོད་(ས)	
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་		
os1外	མྱོད་	མྱོད་	—— (?)	མྱོད་(?)		Cf. མྱོད་
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་*		Cf. མྱོད་ ; *M. 7417.
os2	མྱོད་	I. མྱོད་ II. མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	I. Cf. བཞིལ
os2	མྱོད་	མྱོད་མ*	མྱོད་	མྱོད་མ	(མྱོད་(ས))	*S.47.
os2	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་	མྱོད་*		*M. 7230.

種 別	能 動			受 動		命 令	備 考
	現 未	在 來	過 去	現 未	在 來	過 去	
os2	ཕྱོད	(བ)ཕྱོད*	[བཕྱོད]	བཕྱོད			Cf. ཕྱོད ; *S. 47.
os2	ཕྱོབ	(བ)ཕྱོབ*	བཕྱོབ	བཕྱོབས	ཕྱོབ(ས)		*S. 47.
os2	ཕྱོམ	བཕྱོམས	བཕྱོམ	བཕྱོམས	ཕྱོམ(ས)		
os2	ཕྱོར	བཕྱོར	བཕྱོར	བཕྱོར			
os1 _外	ཕྱོང	ཕྱོངས	[ཕྱོང](?)	ཕྱོངས			
os2	ཕྱོ	བཕྱོ	བཕྱོ	བཕྱོ			
os2	ཕྱོན	བཕྱོན*	བཕྱོན**	བཕྱོན***			*S. 47 ; **S. 49 ; ***M. 7417 (bsgrun は bskrun の誤).
os2	ཕྱོད	བཕྱོད	བཕྱོད*	བཕྱོད			*S. 49, M. 8644.
h 2	བཕྱུམ	ཕྱུམས	—	[ཕྱུམས]			
h 1		ཕྱུམས	[བཕྱུམ](?)	ཕྱུམས			Cf. ཕྱུམ
h 2	བཕྱུར	ཕྱུར	ཕྱུར	ཕྱུར			
h2b		བཕྱུར	བཕྱུར	བཕྱུར			
h 2	བཕྱེམས	ཕྱེམས	(?) ཕྱེམས				
h 2	བཕྱེངས	ཕྱེངས	(?) ཕྱེངས*				Cf. ཕྱོད, ཕྱེངས ; *M. 6394.
h 2	བཕྱེབ	ཕྱེབས	(?) ཕྱེབས*				*M. 6840.
h 2	བཕྱེལ	ཕྱེལ	(?) ཕྱེལ				Cf. ཕྱེལ
h2b	བཕྱོན	བཕྱོན	[བཕྱོན]	བཕྱོན			
h 2	བཕྱོལ	I. ཕྱོལ	(?) ཕྱོལ				I. Cf. ཕྱོལ
h2b		II. ཕྱོལ	བཕྱོལ*	བཕྱོལ	ཕྱོལ		*S. 48.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
h2b	འཕྱིག(ས)	བཕྱིགས	བཕྱིག	བཕྱིགས		
h 1	འཇུ	འཇུས	——	——		
h 2	འཇུག	ཇུག	——(?)	——(?)		
h 2	འཇོག	ཇོག	(?)ཇོག	ཇོག		
h 2	འཇོང	ཇོང	(?)ཇོང	ཇོང		
h 1	འཇོམ	འཇོམས	——(?)	——(?)		
h 1	འཇམ	འཇམས	[འཇམ] (?)	འཇམས		
h2b	འཇམབ	བཇམབ(ས)*	བཇམབ**	བཇམབ(ས)		Cf. རྒྱབ; *S. 47; **S. 49.
h 1	འཇི	འཇིས	[འཇི] (?)	འཇིས		Cf. རྒྱི
h2b外	འཇིད	ཇིད	བཇི (?)	ཇིད*		*M. 6611.
h 1	འཇུག	འཇུགས	འཇུག(?)	འཇུགས**		Cf. རྒྱག, བཇུག; *འཇུགས (M. 83.); **M. 5196.
h2b	འཇུད	ཇུམ	ཇུ	ཇུས		
h 2	འཇོ	ཇོས	——(?)	——(?)		
h2d外	འཇོལ	ཇོལ	ཇོལ	ཇོལ	ཇོལ	
o 1	ཇོད	ཇོདས	ཇོད	ཇོདས		
o 1	ཇོབ	ཇོབས	ཇོབ	ཇོབས		
b 1	བཇོ	བཇོས	བཇོ*	བཇོས	བཇོས	*S. 49.
b 1	བཇོད	བཇོས	བཇོ	བཇོས		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
b 1	བཞོམ	བཞོམས*	[བཞོམ]	བཞོམས		*S. 47.
b 1	བཞིད	བཞིས	བཞི	བཞིས	བྱིས	
b 1	བཞར	བཞརས*	བཞར**	བཞརས		*S. 47; **S. 49.
b 1	བཞར	བཞརས*	བཞར	བཞརས		*S. 47.
b 1	བཞར	བཞརས	བཞ	བཞར		
b 1	བཞེ	བཞེས	—	—		
b 1	བཞོ	བཞོས	བཞོ*	བཞོས		*S. 49.
h 1	བཞག	བཞགས	— (?)	བཞགས		
h2d	བཞགས	བཞག	བཞག	བཞག	བྱོག	
h2b	བཞག	བཞགས*	བཞག**	བཞགས	བྱོགས	*bgam. S. 47; **S. 49.
h2d	བཞག(ས)	བཞག	བཞག*	བཞག	བྱག	*S. 52.
h 2	བཞུད	བཞུ	(?)	བཞུ		
h 2	བཞུས	—	—	—		
h2d	བཞུས	བཞུས	བཞུས	བཞུས	བཞུས(ས)	Cf. བཞུས, བཞོད
h2d	བཞེངས	བཞང	བཞང	བཞང	བྱོང	Cf. བཞེངས, བྱོང
h2d	བཞེབས	བཞབ	བཞབ*	བཞབ	བྱོབ	Cf. བྱོབ; *S. 52.
h2d	བཞེལ	བཞལ	བཞལ	བཞལ	བྱོལ	Cf. བཞེལ
h2d	བཞེས	བཞས	བཞས	བཞས	བྱོས	
h 2	བྱོ	བྱོས	—	[བྱོས]		
h 1	བྱོ	བྱོས	[བྱོ]	བྱོས		Cf. བྱོ

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
h2d	འགོག	གཏོག	འགོག	གཏོག	ཁོག	
h2d	འགོད	གཏོད	འགོད	གཏོད*	ཁོད	Cf. ཁོད; *M. 6057.
h 2	འགོལ	གོལ	—	(གོལ)		
h 1	འགུང	འགུངས	[འགུང]	འགུངས		
h 1	འགྲུ	འགྲུས	— (?)	— (?)		
h 2	འགྲུར	གྲུར	—	—	} གྲུར	Cf. གྲུར
	他	他	གྲུར	གྲུར		
h 2	འགྲུ	གྲུས	—	(གྲུས) (?)	གྲུས(?)	Cf. འགྲུད
h2b	འགྲུད	འགྲུས	འགྲུ	འགྲུས		Cf. འགྲུ
h 2	འགྲུལ	གྲུལ	(?)	གྲུལ	གྲུལ	Cf. གྲུལ
h 2	འགྲུགས	གྲུགས	(?)	གྲུགས*		Cf. འགྲུགས, གྲུག; *M. 6859.
h 2	འགྲུབ	གྲུབ	(?)	གྲུབ		
h 1	འགྲུམ	འགྲུམས	—	—		
h 2	འགྲུལ	གྲུལ	(?)	གྲུལ		Cf. གྲུལ, འགྲུལ
h 2	འགྲུ	གྲུས	—	[གྲུས]		
h 1		འགྲུས	[འགྲུ]	འགྲུས		
h 2	འགྲུབ	གྲུབ	— *	(གྲུབ)		Cf. གྲུབ; *འགྲུབ འཇུག.
h 2	འགྲུམ	གྲུམ (?)	(?)	གྲུམ (?)		
h2d	འགྲུམ(ས)	འགྲུས	འགྲུམ	འགྲུས*	འགྲུམས	*M. 6065.
(?)	འགྲུལ	འགྲུལ*	(?)	འགྲུལ		Cf. འགྲུལ; *S. 47.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 來	過 去	現 在 來	過 去		
h 2	ṛṣ	ṣṛ, ṣṣ	—	—	ṣṛ*	Cf. ṛṣṛ; *稀に ṛṣ(ṣ) (J.)
h 2	ṛṣ	I. ṣṛ(ṣ)	—	—	—	Cf. ṛṣṣ
h2d		II. ṛṣṛṣ	ṛṣṛṣ	ṛṣṛṣ		
h 2	ṛṣṣ	I. ṣṣ	—	(ṣṣ)*	ṣṣ	*M. 401, 402.
h2d		II. ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ		
or2外	ṣ	ṣṣ	—	—	—	—
or2	ṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ*	ṣṣ	*M. 7665.
or2	ṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	—	—
or2外	ṣ	ṣṣ	ṣ	ṣṣ*	—	*M. 6234, 6840.
or2	ṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṣṣ	—
or2	ṣṣ	ṛṣṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣṣ	ṣṣ(ṣ)	—
or2	ṣṣ	ṛṣṣ*	ṛṣṣ**	ṛṣṣ	ṣṣ	*S. 47; **S. 49.
		ṛṣṣ*	ṛṣṣ	ṛṣṣ		
or2	ṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṣṣ	*S. 47.
or2	ṣṣ	ṛṣṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣṣ	—	Cf. ṣṣ
os2	ṣṣ	ṛṣṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣṣ	—	—
os2	ṣṣ	ṛṣṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣṣ	ṣṣ(ṣ)	—
os2	ṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣ	—	Cf. ṛṣṣ
os2	ṣṣ	ṛṣṣ(ṣ)	ṛṣṣ*	ṛṣṣ(ṣ)**	—	*S. 49; **M. 6714.
os2	ṣṣ	ṛṣṣṣ	ṛṣṣ	ṛṣṣṣ	—	—

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 未	在 來	過 去	現 未	在 來	過 去		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ(ṣ)	*M. 1319; **M. 1324.
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		Cf. ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		Cf. ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	Cf. ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		Cf. ṣṣ, ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ(ṣ)	Cf. ṣṣ; *M. 4272; **M. 7054, 7055.
os2	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		Cf. ṣṣ; *S. 47.
os1 ^外	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	—	—	—		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ(ṣ)	Cf. ṣṣ; *M. 7221.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	Cf. ṣṣ, ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
b 1	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ
b 1	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ*		Cf. ṣṣ; *M. 6714.
o 1	ṣ	ṣ	[ṣ]	[ṣ]		
o 1	ṣ	ṣ	[ṣ]	ṣ*		*M. 7356.
d 1	ṣṣ	ṣṣ	[ṣṣ]	ṣṣ		
m1	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
or2	ṣ	ṣ	ṣ	ṣ*	ṣ	*M. 6969.
or2	ṣ	ṣ	ṣ*	ṣ		*S. 49.
or2	ṣ	(ṣ)ṣ	ṣ	ṣ	ṣ	
or2	ṣ	ṣ	[ṣ]	ṣ		
or2	ṣ	ṣ	ṣ*	ṣ	ṣ, ṣ	*S. 49. 恐らく ṣ を誤つたもの.
or2	ṣ	ṣ	ṣ	ṣ		
os1外	ṣ	ṣ	— (?)	— (?)		
os2	ṣ(ṣ)	ṣ	ṣ	ṣ*	ṣ	*M. 2616.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
os2	𑖦(𑖦)	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	
os2	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	
g 1	𑖦𑖦(𑖦)	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	
g 1	𑖦𑖦(𑖦)	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦		=𑖦𑖦(𑖦)
g 2	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦*	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦(𑖦)	Cf. 𑖦𑖦𑖦 I.; *S. 52, M. 5183.
g 2	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	[𑖦𑖦𑖦]	𑖦𑖦𑖦𑖦		
g 2	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦*	𑖦𑖦𑖦, 𑖦𑖦𑖦	*M. 1306.
b 1	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦		=𑖦𑖦
b 1	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦*	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	Cf. 𑖦𑖦𑖦, 𑖦𑖦𑖦; *S. 49.
ol2外	𑖦𑖦(𑖦)	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦		=𑖦𑖦𑖦(𑖦)
o 1	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	—	—		命にJ. は 𑖦𑖦𑖦 を当てるが、 同一語根ではない。
o 1	𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	—	—		
m1	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	—	—		
m1	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	[𑖦𑖦𑖦]	𑖦𑖦𑖦𑖦		
h 2	𑖦𑖦𑖦*(I. 𑖦𑖦𑖦(𑖦))		—	(𑖦𑖦𑖦(𑖦))		*=𑖦𑖦𑖦𑖦; I. Cf. 𑖦𑖦𑖦𑖦 II.=𑖦𑖦𑖦𑖦
h2b	II. 𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦		
h2b	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦𑖦	𑖦𑖦𑖦(𑖦)	

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 在	過 去	過 去	現 在	過 去	過 去		
h2b h2	འཆད་	I. འཁད II. ཆད	འཁད	འཁད (ཆད)	ཞོད [ཆོད]		II. Cf. ཁཚོད	
h2b	འཆབ	འཚབས	འཚབ	འཚབས	ཆོབ			
h2b(?)	འཆམ	འཚམ(?)	(?) འཚམ(?)					
h 1 h2b	འཆད	{ འཆས འཚས }	—— འཚད	{ འཆས } (?) འཚས	ཆོས		Cf. འཆོས	
h 2	འཆར	ཁར	——	——				
h 2 活用なし	འཆི ཞི	{ }	——	——				
h2b	འཆིང	འཚིངས	འཚིང	འཚིངས*	འཆིང(ས)		*M. 7058.	
h2b	འཆིབ(ས)	འཚིབས	འཚིབ	འཚིབས	ཆོབས			
h 2	འཆིར	ཅིར	(?) ཅིར					
h 1 h2b	འཆུ	{ I. འཆུས II. འཚུས }	—— འཚུ	(འཆུས) འཚུས	ཆུས		I. Cf. ཁུཅ(ད) II. Cf. འཚུ	
h2b	འཆེ	འཚེས	འཚེ	འཚེས	ཆོས			
h2b	འཆེག	འཁེགས	འཁེག	འཁེགས	ཞོག		= འཆེགས	
h2b	འཆེམས	འཚེམས	འཚེམ	འཚེམས				
h 2 h2g h2b	འཆོར	{ I. ཞོར II. འཁོར }	—— { ཁཞོར འཁོར }	(ཞོར) འཁོར			II. Cf. ཁཞོར	

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
h2b 活用なし	ṛkṛ{ I. ṛkṛ II. ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ	ṛkṛ* ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ		*S. 49, ṛkṛ (J.) (S. 52.) II.=ṛkṛ
命. のみ 活用 h2b	ṛkṛ{ ṛkṛ ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ	— ṛkṛ	[ṛkṛ](?) ṛkṛ	ṛkṛ	Cf. ṛkṛ
命. のみ 活用	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	
h 2	ṛkṛ	ṛkṛ	(?) [ṛkṛ](?)			
h2b	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ		
h2g	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ*	ṛkṛ	ṛkṛ	*M. 4527.
h2g (?)	ṛkṛ{ I. ṛkṛ II. (ṛkṛ)	ṛkṛ —	ṛkṛ —	ṛkṛ (ṛkṛ)	ṛkṛ, ṛkṛ	
h2b	ṛkṛ(ṛkṛ)	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ		
h2g外	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ		
h2g 活用なし	ṛkṛ{ I. ṛkṛ II. ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ	ṛkṛ ṛkṛ		
h 1	ṛkṛ { I. ṛkṛ	ṛkṛ	(ṛkṛ)(?)	ṛkṛ		
h2b	II. ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ		
h 2	ṛkṛ { I. ṛkṛ	—	—	ṛkṛ	ṛkṛ	
h2g	II. ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	
h 1	ṛkṛ	—	[ṛkṛ]	(?)		
h2g	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ	ṛkṛ		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
(?)	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	(?)	ᄋᄋᄋ		
h2b	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
h2g	ᄋᄋᄋ ^{I.}	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	*誤つて ᄋᄋᄋ とすることがよくある。
h2g	ᄋᄋᄋ ^{II.}	(ᄋᄋᄋᄋ)ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
h2g	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ	*J. は更に ᄋᄋᄋ を加へる； **M. 419, 6608.
or2	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
or2	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ		
or2	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋ**		*M. 4477, 6706 ; **M. 2782, 6859.
命. のみ 活用	ᄋᄋ	ᄋᄋ	ᄋᄋ	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
命. のみ 活用	ᄋᄋ	ᄋᄋ	—	—	ᄋᄋᄋ	Cf. ᄋᄋᄋ
o 1	ᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	[ᄋᄋ]	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
m1	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	
or2	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	—	—		
or2	ᄋᄋᄋ	{ ᄋᄋᄋᄋ (ᄋᄋᄋᄋ) }	{ ᄋᄋᄋᄋ* ᄋᄋᄋᄋ }	ᄋᄋᄋᄋ		*ᄋᄋᄋᄋ (D., J.)
or2	ᄋᄋᄋ*	{ ᄋᄋᄋᄋ ᄋᄋᄋᄋ }	{ ᄋᄋᄋᄋ ᄋᄋᄋᄋ }	ᄋᄋᄋᄋ		*誤つて ᄋᄋᄋᄋ とすることがある。
or2	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋ
or2	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(D.)	

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ; *M. 8647; **M. 8481
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ**		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ(ṣ)	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ(ṣ)	
os2	ṣṣ(ṣ)	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ		
os2	ṣṣ(ṣ)	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ		
os2	ṣṣ	I. ṣṣ II. ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	II. Cf. ṣṣ
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	
os2	ṣṣ	ṣṣ*	ṣṣ*	ṣṣ	ṣṣ(D.)	*S. 47, ṣṣ(D.); **S. 49, ṣṣ(D.)
os2	ṣṣ(ṣ)	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	
os2	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ
b 1	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ
b 1	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ
命. のみ 活用	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
g 1	གྱུག	གྱུགས	གྱུག*	གྱུགས		*གྱུགས S. 52.
g 1	གྱུག	{ གྱུགས }	{ གྱུག* }	{ གྱུགས }		
g 2						Cf. གྱུག; *S. 52.
g 1	གྱུབ	གྱུབས	གྱུབ*	གྱུབས		Cf. གྱུབ(ས), གྱུབ, གྱུབ;
g 2	གྱུབ	གྱུབ	གྱུབ*	གྱུབ		*S. 52.
g 2	གྱུང	གྱུང	གྱུང	གྱུང*	ཁྱུང	Cf. གྱུབ; *S. 52.
g 2	གྱུང	གྱུང	གྱུང	གྱུང*	ཁྱུང	*M. 2553, 2602, 2603.
g 2	གྱུང	{ གྱུང }	{ གྱུང* }	{ གྱུང }		*M. 6529.
命. のみ 活用	གྱུང				གྱུང	*M. 6529, 7376.
b 1	བྱིག	བྱིགས	བྱིག	བྱིགས		Cf. བྱིག
or2	ཁྱིབ	བྱིབས	བྱིབ	བྱིབས	ཁྱིབ(ས)	Cf. ཁྱིབ
or2	ཁྱིང	བྱིངས	བྱིང	བྱིངས		Cf. ཁྱིང
or2	ཁྱིན	བྱིན	བྱིན	བྱིན*	ཁྱིན, བྱིན	ཁྱིན: ācraṇa (所依); བྱིན: ācṛita (能依); *M. 2352.
or2	ཁྱིག	བྱིགས	བྱིག*	བྱིགས	{ ཁྱིག(ས) }	*S. 49.
活用なし	ཁྱིགས	ཁྱིགས	ཁྱིགས	ཁྱིགས		ཁྱིགས は ཁྱིག の過去形から生じたものであらう.
or2	ཁྱིའ	བྱིའ	བྱིའ*	བྱིའ		*S. 49.
ol 2	ཁྱི	བྱིས	བྱི	བྱིས	ཁྱིས, བྱི	Cf. ཁྱིས
ol 2	ཁྱིབ	བྱིབས	བྱིབ	བྱིབས	ཁྱིབ	
ol 2	ཁྱིས(ས)	བྱིསས	བྱིས	བྱིས		
o 1	ཁྱིང	ཁྱིང	ཁྱིང	ཁྱིང		ཁྱི が基本子音をあらはす.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	Cf. ᄃᆞᆯ
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ*	ᄃᆞᆯ**	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	Cf. ᄃᆞᆯ; *S. 48; **S. 49.
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		Cf. ᄃᆞᆯ
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	Cf. ᄃᆞᆯ
os1 ^外	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ(?)	ᄃᆞᆯ		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ*		*M. 2614.
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os2	ᄃᆞᆯ	{ ᄃᆞᆯ* ᄃᆞᆯ** }	{ (?) [ᄃᆞᆯ] ᄃᆞᆯ }	{ ᄃᆞᆯ ᄃᆞᆯ** }	ᄃᆞᆯ	Cf. ᄃᆞᆯ; *S. 47, ᄃᆞᆯ (D.); **ᄃᆞᆯ(?)
b 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]* (?)	ᄃᆞᆯ		*ᄃᆞᆯ (D.) (?)
o 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ] (?)	[ᄃᆞᆯ] (?)		

種 別	能 動			受 動		命 令	備 考
	現 未	在 來	過 去	現 未	在 來	過 去	
h2b	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ*	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	*ᄋᄃᄃ (D.) は誤?
h 1	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	[ᄋᄃᄃ]	ᄋᄃᄃᄃ			
h 1	ᄋᄃᄃ	自 ᄋᄃᄃᄃ	—	—			
h2b		他 ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ			Cf. ᄋᄃᄃ
h 2	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	—	[ᄋᄃᄃ]			
h2g外		ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ*	ᄋᄃᄃᄃ			Cf. ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ); *S. 52.
h 1	ᄋᄃ	ᄋᄃᄃ	—	[ᄋᄃᄃ]	ᄋᄃᄃ		
h2b		ᄋᄃᄃ	ᄋᄃ	ᄋᄃᄃ*	ᄋᄃ		*M. 6338.
h 1	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	—	[ᄋᄃᄃᄃ]	ᄋᄃᄃ		
h2b		ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)	ᄋᄃᄃ*	ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)			*S. 49.
h 1	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	—	[ᄋᄃᄃᄃ]	ᄋᄃᄃ		
h2g		ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)	ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)		Cf. ᄋᄃᄃᄃ, ᄋᄃᄃᄃ(ᄃ)
h 1	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ(?)	[ᄋᄃᄃᄃ]	ᄋᄃᄃ		
h2b		ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ		Cf. ᄋᄃᄃᄃ
h 2	ᄋᄃᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	—	(ᄋᄃᄃᄃ)			Cf. ᄋᄃᄃᄃ
h 1	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃᄃ	[ᄋᄃᄃ]	[ᄋᄃᄃᄃ]	ᄋᄃᄃᄃ		Cf. ᄋᄃᄃᄃ, ᄋᄃᄃᄃ
h 2	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	—	—	ᄋᄃᄃ		Cf. ᄋᄃᄃ
h 2	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ*			
活用なし		ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ*		*M. 1024, 6341.
h2g	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	ᄋᄃᄃ	

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
o 1	ṣ	ṣṣ	[ṣ]	ṣṣ		
o 1	ṣ	ṣṣ	[ṣ]	ṣṣ	ṣṣ	Cf. ṣṣ
o 1	ṣ	ṣṣ	—	—		
g 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	[ṣṣṣ]	ṣṣṣṣ*		*M. 6465.
g 1	ṣṣ	ṣṣṣ	ṣṣ*	ṣṣṣ		*S. 52;
g 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣṣṣ**		*S. 52; **M. 7080.
g 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	[ṣṣṣ]	ṣṣṣṣ		
b 1	ṣṣṣ	ṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣṣ		Cf. ṣṣṣ, ṣṣṣ; *S. 49.
b 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣṣṣ**		*S. 49; **bdug (M. 6133.)
b 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣṣṣ		*S. 49.
ḥ 1	ṣṣṣ	ṣṣṣṣ	[ṣṣṣ](?)	ṣṣṣṣ	ṣṣṣṣ	= ṣṣṣ
ḥ 1	ṣṣṣ	ṣṣṣ	— (?)	— (?)		Cf. ṣṣṣ, ṣṣṣ
ḥ2g	ṣṣṣ	ṣṣṣ	ṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣṣ(ṣ)	*M. 6066.
ḥ 1	ṣṣ	ṣṣṣ	—	(ṣṣṣ)*		Cf. ṣṣṣ; *M. 6265, 6902.
ḥ 2	ṣṣṣ	{ ṣṣ	— (?)	[ṣṣ]	ṣṣ (J.)	
ḥ2b		{ ṣṣṣ	ṣṣṣ	ṣṣṣ*	ṣṣ (J.)	*M. 2429.
ḥ 2	ṣṣṣ	{ ṣṣṣ	—	[ṣṣṣ]	ṣṣṣ	
ḥ2g		{ ṣṣṣṣ	ṣṣṣṣ	ṣṣṣṣ		
ḥ2g	ṣṣṣṣ(ṣ)	ṣṣṣṣ(ṣ)	ṣṣṣṣ	ṣṣṣṣ(ṣ)	ṣṣṣṣ	

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 在	過 去		現 在	過 去			
h 2 h 1	འདོང	{ འདོངས	— —	— —	— —	འོང(ས)(J.) འོང		Cf. འདོང
h 2	འདོད	འོད		(?) འོད	འོད			Cf. འདོད, འོད
h2g	འདོབས	འདོབ	འདོབ*	འདོབ**	འོབ			Cf. འདོབས; *S.52; **M.5353.
h2g	འདོགས	འདོགས*	འདོག(ས)	འདོགས	འོགས			Cf. འདོག; *འདོགས? (J.)
h 2 h 1	འདོང	{ འདོང	— —	— —	— —	འོང འོང		Cf. འདོང
h2g	འདོན	འདོན	འདོན	འདོན*	འོན			Cf. འདོན; *M. 5338.
h 2 h2g外	འདོམ(ས)	{ (འདོམས)	— འདོམ	[འདོམ] འདོམས	{ }	འོམ འོམས		
h 2	འདོར	འོར	འོར*	འོར	འོར			Cf. འདོར, འོར; *M. 7200.
h 2 (?)	འདུལ	{ འདུལ		(?) འདུལ* (?) འདུལ				* = འདུལ, འདུལ
h 2 h 1	འདྲི	{ འདྲིས		(?) འདྲི (?) འདྲིས		འདྲི འདྲིས		Cf. འདྲི
h 2	འདྲིལ	{ I. འདྲིལ II. འདྲིལ	— —	(?) འདྲིལ (?) འདྲིལ				I. Cf. འདྲིལ II. Cf. འདྲིལ
h 2 h 1	འདྲུང	{ འདྲུང(?)		(?) འདྲུང (?) འདྲུང(?)		འདྲུང འདྲུང(?)		
h 2	འདྲུབ	འདྲུབ(ས)		(?) འདྲུབ(ས)		འདྲུབ(ས)		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
h 2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	—	—		Cf. ᄋᆞᆯ
h 1	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	— (?)	(ᄋᆞᆯ)*	ᄋᆞᆯ	Cf. ᄋᆞᆯ; *M. 5189.
h 1	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	[ᄋᆞᆯ]	ᄋᆞᆯ		
h 2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	ᄋᆞᆯ*	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	*M. 6582.
or2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	Cf. ᄋᆞᆯ, ᄋᆞᆯ, ᄋᆞᆯ
or1外	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	—	(ᄋᆞᆯ)		Cf. ᄋᆞᆯ
or2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ		
or2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ*	(ᄋᆞᆯ)	Cf. ᄋᆞᆯ; *M. 6629.
or2	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	(ᄋᆞᆯ)	ᄋᆞᆯ*	ᄋᆞᆯ	(ᄋᆞᆯ)	*M. 8712.
or2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ		
or2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ		Cf. ᄋᆞᆯ
ol2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	
o 1	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	—	—	ᄋᆞᆯ	= ᄋᆞᆯ; Cf. ᄋᆞᆯ, ᄋᆞᆯ; ᄋᆞᆯが基本子音をあらはす.
ol2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ (J.)	
ol2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	
(?)	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	—	—		} 同義
ol2	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	—	—		
o 1	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	ᄋᆞᆯ	—	[ᄋᆞᆯ]		ᄋᆞᆯが基本子音をあらはす.
o2(?)	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ	ᄋᆞᆯ(ᄋᆞᆯ)	= ᄋᆞᆯ

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 來	過 去	現 在 來	過 去		
o2(?)	𐀀𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃	𐀀が基本子音をあらはす.
oi2	𐀀𐀃	(𐀀)𐀃𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀃𐀃	Cf. 𐀃𐀃
oi2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃(?)	—	—	—	—
o 1	𐀀𐀃	𐀀𐀃	—	—	𐀀𐀃	Cf. 𐀀𐀃; 𐀀が基本子音をあらはす.
o 1	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	—	—	—	Cf. 𐀀𐀃; 𐀀が基本子音をあらはす.
os1外	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	—	—
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	—	—
os2	𐀀𐀃(𐀃)	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃*	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	} 同義 *M. 8642.
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃*	𐀀𐀃	
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃(𐀃)	Cf. 𐀃𐀃𐀃
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	—	—
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	—
os2	𐀀𐀃	(𐀀)𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	Cf. 𐀃𐀃
os2	𐀀𐀃(𐀃)	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	—	Cf. 𐀃𐀃𐀃
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	—	—
os2	𐀀𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃*	𐀀𐀃𐀃(𐀃)	*M. 399, 7143
b 1	𐀀𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃𐀃	𐀀𐀃𐀃*	𐀀𐀃𐀃𐀃	—	*S. 49.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
os2	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
b 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ*	ᄃᆞᆯ		*S. 49.
d 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ		
d 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
d 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
d 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ*	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ(J.)*	Cf. ᄃᆞᆯ, ᄃᆞᆯ; *S. 52; **ᄃᆞᆯ, ᄃᆞᆯ (D.)
d 1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
活用なし	(ᄃᆞᆯ)	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ		Cf. ᄃᆞᆯ
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	Cf. ᄃᆞᆯ
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ(ᄃᆞᆯ)	
os1	(ᄃᆞᆯ)	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ*	ᄃᆞᆯ(ᄃᆞᆯ)	*M. 2602.
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
活用なし	(ᄃᆞᆯ)	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ		
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ(ᄃᆞᆯ)	Cf. ᄃᆞᆯ
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ(ᄃᆞᆯ)	
os1	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	[ᄃᆞᆯ]	ᄃᆞᆯ	ᄃᆞᆯ	

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未	過 去	現 在 未	過 去		
os1 活用なし	ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་		
os1	ཐོས་	ཐོས་ས	[ཐོས་] (?)	ཐོས་ས		
os1	ཐོས་	ཐོས་	[ཐོས་]	ཐོས་*	ཐོས་	*M. 377, 6055.
os1	ཐོས་	ཐོས་	[ཐོས་]	ཐོས་		
os1	ཐོས་	ཐོས་	[ཐོས་] (?)	ཐོས་	ཐོས་	
os1 活用なし	ཐོས་	I. ཐོས་ II. ཐོས་	[ཐོས་]	ཐོས་		I. Cf. ཐོས་
o 1	ཐོས་	ཐོས་*	[ཐོས་]	ཐོས་*		*ཐོས་(D.)
o 1	ཐོས་	ཐོས་	—	—		
h 1	ཐོས་	ཐོས་	[ཐོས་] (?)	ཐོས་		
(?) ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་	(?) ཐོས་			
h 1	ཐོས་	ཐོས་	(?) [ཐོས་]		ཐོས་(ས) } = ཐོས་(ས)	
o 1	ཐོས་	ཐོས་	—	[ཐོས་]		
(?) ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་	(?) ཐོས་			
(?) ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་	(?) ཐོས་			= ཐོས་ II.
h 2	ཐོས་	ཐོས་	(?) ཐོས་			Cf. ཐོས་
h 1	ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་	ཐོས་*	ཐོས་ } ཐོས་(J.)	*M. 5092, 7097, 7098.
h 1	ཐོས་		ཐོས་	ཐོས་		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
h 2	འཕེལ	ཕེལ	—	—		Cf. ཕྱེལ
h 1	འཕོ	འཕོས	—	—	(འ)ཕོས	Cf. ཕོ
h 2	འཕོག	} ཕོག	[ཕོག] (?) ཕོག			
活用なし	ཕོག					
h 2	འཕོངས	ཕོངས	—	—		
h 1		འཕོངས	—	—		
h 1	འཕུ	འཕུས	[འཕུ]	འཕུས		
h 1	འཕུག	འཕུགས	[འཕུག]	འཕུགས		
h 1	འཕུང	འཕུངས	—	—	(འ)ཕྱོར	Cf. དཔུང
命. のみ 活用	འཕུར	འཕུར	འཕུར	འཕུར		
h 2	འཕྱི	ཕྱིས	—	—		
h 1		I. འཕྱིས	—	—		
h2do		ཕྱིས	དཔྱི* (?) ཕྱིས			
h 1		II. འཕྱིས	[འཕྱི] (?) འཕྱིས			
h 1	འཕྱེ	འཕྱེས	—	—		
h 1	འཕྱོ	འཕྱོས	—	(?) — (?)		
h 1	འཕྲ	འཕྲས	[འཕྲ] (?) འཕྲས			Cf. ཕྲ
h 2	འཕྲད	} ཕྲད	ཕྲད	ཕྲད		
活用なし	ཕྲད					
h2do	འཕྲལ	ཕྲལ	དཔྲལ	ཕྲལ	ཕྲལ	Cf. འཕྲལ

II.=འཕྱིད, Cf. འཕྱི; *J. 389.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 來	過 去	現 在 來	過 去		
h2do	ṛṣi	ṛṣ	ṛṣi	ṛṣ	ṛṣ	Cf. ṛṣi II.
(?)	ṛṣṇa	ṛṣṇ	(?)	ṛṣṇ		
h 1	ṛṣi	ṛṣṣ	(ṛṣi)	(?) ṛṣṣ		
h 1	ṛṣ	ṛṣṣ	—	—		Cf. ṛṣ
h2do	ṛṣṇa	ṛṣṇ	ṛṣṇa	ṛṣṇ	ṛṣṇ	
h 2	ṛṣṇ	ṛṣṇ	—	(ṛṣṇ)		Cf. ṛṣṇ
o 1	ṛṣa	ṛṣṇ	(ṛṣa)	ṛṣṇ		
o 1	ṛṣa	ṛṣṇ	(ṛṣa)	ṛṣṇ		
o 1	ṛṣ	ṛṣ, ṛṣṇ	ṛṣ	ṛṣ, ṛṣṇ	ṛṣ	
o 1	ṛṣa	ṛṣṇ	(ṛṣa)	ṛṣṇ*		*M. 2428.
o 1	ṛṣ	ṛṣ	(ṛṣ)	ṛṣ		
o 1	ṛṣa	ṛṣṇ	ṛṣa	ṛṣṇ	ṛṣa(ṣ)	= ṛṣa(ṣ)
d 1	ṛṣṇa	ṛṣṇṇ	(ṛṣṇa)	ṛṣṇṇ		
d 1	ṛṣi	ṛṣṣ	ṛṣi*	ṛṣṣ		*S. 52.
d 1	ṛṣṇa	ṛṣṇṇ	(ṛṣṇa)	ṛṣṇṇ		
(?)	ṛṣṇa	ṛṣṇṇ	(ṛṣṇa)(?)	ṛṣṇṇ		Cf. ṛṣṇa
h 1	ṛṣṇ	ṛṣṇṇ	(ṛṣṇ)(?)	ṛṣṇṇ		
命. のみ 活用	ṛṣṇ	ṛṣṇ	ṛṣṇ	ṛṣṇ	ṛṣṇ	

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
h 2	འབབ	བབ(ས)	—	—	{འབྱོབ བྱོབས	Cf. འབྲེབས
h2do	འབྱིག(ས)	བྱིགས	དབྱིག	བྱིགས	བྱིག(ས)	= འབྱིག, བྱིག
h 1	འབ	འབས	[འབ]	འབས		
h2do	འབྱག(ས)	བྱག(ས)	དབྱག*	བྱག(ས)	བྱག(ས)**	*S. 52; **J. 343.
h 2	འབྱ	I. བྱྱ, བྱས	—	—		
h2do		II. བྱྱ	དབྱ	བྱས	བྱ(ས)	
h2do		བྱྱ	དབྱྱ	བྱྱ	བྱྱ	
h 2	འབྲབ	བྲབ, བྲབ	—	—	བྲབས	Cf. བྲྱབ
h2do	འབྲབས	བྲབ(ས)	དབྲབ	བྲབ(ས)	བྲབ(ས)	
h2do	འབྲམ	བྲམ	དབྲམ	བྲམ	བྲམ	= འབྲམ
h2do	འབྲོས	བྲོ	དབྲོ	བྲོ	བྲོ	Cf. འབྲོ
h 1	འབྱོ	{ འབྱོས	—	[འབྱོས]		
h2do		བྱོ, བྱོ	དབྱོ	བྱོ, བྱོ		
h2do	འབྱོག(ས)	བྱོག, བྱོག	དབྱོག	བྱོག, བྱོག		
h2do	འབྱོགས	བྱོག	དབྱོག	བྱོག	བྱོག	
h 2 (?)	འབྱོྱ	{ བྱོས	—	[བྱོས]	བྱོས	
活用なし		{ བྱོྱ	[བྱོྱ]	བྱོྱ		
(?)	འབྱོར	བྱོར	(?) བྱོར*	བྱོར		*M. 1084, 2553, 2584.
(?)	འབྱང	བྱང	(?) བྱང			
(?)	འབྱས	(འ)བྱསས	(?) (འ)བྱསས			

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 来	過 去	現 在 未 来	過 去		
h 2	འབྱི	བྱི, བྱི(ས)	(?) བྱི, བྱི(ས)*			Cf. འབྱི ; *M. 7031.
h 2	འབྱིང	བྱིང	—	—		Cf. བྱིང
h 2 (?)	འབྱིད	བྱིད, བྱིད	—	—		
h2do	འབྱིན	བྱིང	དབྱིང	བྱིང*	བྱིང	Cf. འབྱིང ; *M. 7141.
(?)	འབྱག	བྱགས	(?) བྱགས	བྱགས		
h 2	འབྱང	བྱང	—	—	བྱང	Cf. འབྱིན
h 2	འབྱེ	བྱེ	—	(བྱེ)*	བྱེ	自 } *(འ)བྱེ (M. 1305.) 他 }
h2do	འབྱེད	བྱེ(ས), བྱེད	དབྱེ	བྱེ(ས), བྱེད	བྱེ(ས), བྱེད	
(?)	འབྱེར	བྱེར	(?) བྱེར			
h 2 (?)	འབྱོ	བྱོ(ས)	(?) བྱོ(ས)		བྱོ, བྱོ(ས)	
(?)	འབྱོག	བྱོགས	(?) བྱོགས			
h 2 (?)	འབྱོང I. བྱང II. བྱོང(ས)	བྱང	—	(?) — (?)		I. Cf. བྱོང
(?)			(?) [བྱོངས](?)			
h 2	འབྱོན	བྱོན	—	—	བྱོན	
h2do	འབྱོལ	བྱོལ	དབྱོལ	བྱོལ	བྱོལ	
h 1	འབྱངས	འབྱངས	[འབྱང] འབྱངས		འབྱོང(ས)	
(?)	འབྱད	བྱད	(?) བྱད		བྱོད	
(?)	འབྱབ	བྱབ	(?) བྱབ		བྱོབ	
h 2	འབྱལ	བྱལ	—	—	བྱོལ (J.)	Cf. འབྱལ

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 来	過 去	現 在 未 来	過 去		
h2do h 2	ᄋᄋᄋᄋ { I. ᄋᄋᄋᄋ II. ᄋᄋᄋᄋ }	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ** (ᄋᄋᄋᄋ)	ᄋᄋᄋᄋ	*S. 52; **M. 5214. II. Cf. ᄋᄋᄋᄋ
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	(?) ᄋᄋᄋᄋ			
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)		(?) ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)			
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		
ol(?) (稀) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)		(?) ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)			
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)		(?) ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)		
(?) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		(?) ᄋᄋᄋᄋ			
命. のみ 活用	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	[ᄋᄋᄋᄋ]	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	Cf. ᄋᄋᄋᄋ; *M. 6714.
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	[ᄋᄋᄋᄋ]	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ	*M. 6343, 7143.
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	[ᄋᄋᄋᄋ]	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*		*M. 6584.
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
活用なし	(稀) ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ	*M. 2860; **M. 722.
os1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ(ᄋᄋ)*		Cf. ᄋᄋᄋᄋ I.; *M. 2554.

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 在 未 来	過 去		現 在 未 来	過 去			
os1 活用なし	ᳵ᳚᳚᳚ (稀)ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚			Cf. ᳵ᳚᳚᳚
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚		
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		— (?)	— (?)			
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			
o 1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		— (?)	— (?)			
o 1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			
o 1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚*		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			*J. は ᳵ᳚᳚᳚ を加へる.
d 1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚ ^(D)		— (?)	— (?)			*ᳵ᳚᳚᳚ (M. 487, 1885.)
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		—	—			
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚᳚			
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚			
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚		
or1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		—	—			
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚ (?)	ᳵ᳚᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚
os1	ᳵ᳚᳚᳚	ᳵ᳚᳚᳚᳚		ᳵ᳚᳚᳚*	ᳵ᳚᳚᳚**			*M. 8643; **M. 500.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 来	過 去	現 在 来	過 去		
os1	ལྟོ	ལྟོས	—	—		} 同義 = ལྟོ; * ལྟོ(?)
o 1	ལྟོ	ལྟོས	—	—		
os1	ལྟོ	ལྟོས	ལྟོས* (?)	ལྟོས	ལྟོས	
g 1	གཙོ	གཙོས	[གཙོ]	གཙོས		
g 2	གཙོད	གཙོདས	གཙོད*	གཙོདས		*S. 52.
g 1	གཙོ	གཙོས	[གཙོ]	གཙོས		Cf. རྩོ
b 1	བཙོད	བཙོདས	བཙོད	བཙོདས		Cf. རྩོད
b 1	བཙོད	བཙོདས	[བཙོད]	བཙོདས	བཙོད(J.)	
b 1	བཙོད	བཙོདས	བཙོད*	བཙོདས**		*S. 49; **M. 7408.
b 1	བཙོད	བཙོདས	བཙོད*	བཙོདས**		Cf. རྩོད; *S. 49; **M. 2669.
b 1	བཙོད	བཙོདས	བཙོད*	བཙོདས		*S. 49.
or2	ལྟོ	(བཙོད)ས	བཙོད	བཙོདས	(བཙོད)ས	
or2	ལྟོ	(བཙོད)ས	བཙོད*	བཙོདས	(བཙོད)ས	*S. 49.
or2	ལྟོ	(བཙོད)*	བཙོད**	བཙོད	ལྟོ(J.)	*ལྟོ (D., J.), ལྟོ (S. 48); **S. 49.
or2	ལྟོ	(བཙོད)ས	བཙོད	བཙོདས	ལྟོ(J.)	
or2	ལྟོ	བཙོདས	བཙོད	བཙོདས	(བཙོད)ས	
or2	ལྟོ	བཙོད	བཙོད*	བཙོད		*S. 49.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
or2 or1外	𑖀𑖄𑖅𑖆 {	(𑖄)𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆* 𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆	{ 𑖀𑖄𑖅𑖆(𑖅) }	*S. 49.
os1外	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆		
o 1	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	[𑖀𑖄𑖅𑖆] (?)	𑖀𑖄𑖅𑖆		
o 1 活用なし	𑖀𑖄𑖅𑖆 {	𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆 (?)	{ 𑖀𑖄𑖅𑖆 }	{ 𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆 (?) }		
o 1 活用なし	𑖀𑖄𑖅𑖆 {	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆	{ 𑖀𑖄𑖅𑖆 }	{ 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖀𑖄𑖅𑖆 }		
h 2 h2b	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 {	𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	— 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	[𑖀𑖄𑖅𑖆] 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	{ 𑖀𑖄𑖅𑖆 }	Cf. 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆
(?) h2b	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 { I. II.	𑖀𑖄𑖅𑖆 (𑖄)𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 (?) [𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆]	𑖀𑖄𑖅𑖆 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆		
h1, 2 h2b	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆(𑖅) { I. II.	(𑖄)𑖀𑖄𑖅𑖆	—	(𑖄)𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	*S. 48; **S. 50.
h 2		𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	—	—		
h 2	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	(?) 𑖀𑖄𑖅𑖆	—	𑖀𑖄𑖅𑖆	
命. のみ 活用	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆	
h 2	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆*	𑖀𑖄𑖅𑖆	𑖀𑖄𑖅𑖆	*M. 5184.
h 2	𑖀𑖄𑖅𑖆 {	𑖀𑖄𑖅𑖆	—	[𑖀𑖄𑖅𑖆]		
h2b		𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆*	{ 𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆 }*	𑖄𑖀𑖄𑖅𑖆		
h2g			{ 𑖀𑖄𑖅𑖆 }			*S. 48; **S. 49.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 来	過 去	現 在 未 来	過 去		
h 2	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	—	—		Cf. ᳵᳵᳵᳵᳵ
h 2	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	—	—		Cf. ᳵᳵᳵᳵ
h 2	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	—	—		
h2b	ᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	{ ᳵᳵᳵᳵ ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ		Cf. ᳵᳵᳵᳵ
h2g	ᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ		ᳵᳵᳵᳵ		
h 2	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	(?) ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ(ᳵ)		
h 1	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	(ᳵᳵᳵᳵ)(?)	ᳵᳵᳵᳵᳵ		
h 2	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	—	[ᳵᳵᳵᳵᳵ]	ᳵᳵᳵᳵᳵ	
h2b		ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ*	ᳵᳵᳵᳵᳵ		*S. 49.
h 2	ᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	—	—	ᳵᳵᳵᳵ	
h2g		ᳵᳵᳵᳵ(ᳵ)	ᳵᳵᳵᳵ	(ᳵ)ᳵᳵᳵᳵ		
h2b	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ*	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	*S. 48, ᳵᳵᳵᳵᳵ (D., J.)
h 2	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	(?) ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ(J.)		
h2b	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ*	ᳵᳵᳵᳵᳵ**	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ(J.)	*S. 48; **S. 49.
h2b	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	
h2b	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	
命. のみ 活用	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	
h2g外	ᳵᳵᳵᳵᳵ	(ᳵᳵ)ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ	(ᳵᳵ)ᳵᳵᳵᳵᳵᳵ		Cf. ᳵᳵᳵᳵᳵ
h 2	ᳵᳵᳵᳵᳵ	ᳵᳵᳵᳵᳵ	[ᳵᳵᳵᳵᳵ](?)	ᳵᳵᳵᳵᳵ		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 来	過 去	現 在 未 来	過 去		
h2g	ṛṇ	ṇṇ	ṇṇ	ṇṇ		
h2g	ṛṇṇ	(ṇ)ṇṇ	ṇṇṇ*	ṇṇṇ	ṇṇ(ṇ)(J.)	= ṇṇ; *M. 4625.
h1	ṛṇ	ṇṇṇ	(ṇṇ)	ṇṇṇ		
h2g	ṇṇṇṇ	{ ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ*	{ ṇṇṇ(ṇ)(J.)	Cf. ṇṇṇṇṇ; *M. 6064.
o1	ṇṇ	{ ṇṇṇṇ	(ṇṇ)	ṇṇṇṇ		
h2	ṇṇṇ	{ ṇṇṇ	—	ṇṇṇ	{ ṇṇṇ	Cf. ṇṇṇṇ *S. 52.
h2g	ṇṇṇ	{ ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ*	ṇṇṇṇ		
h2	ṇṇṇṇ	{ ṇṇṇṇ	—	ṇṇṇṇ	{ ṇṇṇṇ	*M. 2669.
h2g	ṇṇṇṇ	{ ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ*	ṇṇṇṇṇ		
h2g	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇ (J.)	
h1	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	(ṇṇṇṇ)	ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ (J.)	
h2g	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ		
h2b	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ		
or2	ṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇ	ṇṇṇ*	ṇṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇ(ṇ)	*M. 383.
or2	ṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇṇ	ṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇ(ṇ)	
or2	ṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇṇ	ṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	(ṇ)ṇṇṇ(ṇ)	
or1外	ṇṇṇṇ	{ ṇṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇṇ		
or2		{ ṇṇṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇ	ṇṇṇṇṇṇṇ		

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在	過 去	現 在	過 去		
o 1	ṛ	I. ṛṣ	ṛ	ṛṣ		
o 2		II. (ṇ)ṛṣ	ṇṛ*	ṇṛṣ		*S. 50.
g 1	ṣṛṇ	ṣṛṇṣ	ṣṛṇ	ṣṛṇṣ		
g 1	ṣṛṣ	ṣṛṣṣ	ṣṛṣ	ṣṛṣṣ		Cf. ṛṣṣṣ
b 1	ṇṛṇ	ṇṛṇṣ	(ṇṛṇ)	ṇṛṇṣ	ṇṛṇṣ(J.)	
b 1	ṇṛ	ṇṛṣ*	ṇṛ**	ṇṛṣ		*S. 48; **S. 50.
o 1	ṣ	ṣṣ	— (?)	ṣṣ*	ṣṣ(ṣ)	
o 2		(ṇ)ṣṣ	ṇṣṣ	ṇṣṣ		*M. 2581, 7040.
o 1	ṣṇ	ṣṇṣ(D.)	— (?)	— (?)		
o 2	ṣṣ	(ṇ)ṣṣṣ	ṇṣṣ*	ṇṣṣṣ	ṣṣṣ(J.)	
o 2	ṣṣ(ṣ)	(ṇ)ṣṣṣ	ṇṣṣ*	ṇṣṣṣ		*S. 50.
o 2	ṣṣṣ(ṣ)	ṇṣṣṣṣ	ṇṣṣṣ*	ṇṣṣṣṣ		*S. 50.
o 2	ṣṣṣ	(ṇ)ṣṣṣṣ	ṇṣṣṣ*	ṇṣṣṣṣ		Cf. ṣṣṣ; *M. 3407.
g 2	ṣṣṇṇ(ṣ)	ṇṣṣṇṇ*(?)	ṇṣṣṇṇ**	ṇṣṣṇṇ(?)	ṇṣṣṇṇ	*S. 48. (?) ; **S. 52.
g 1	ṣṣṣṣ	ṣṣṣṣṣ	—	—		
b 1	ṇṣṣ	ṇṣṣṣ	ṇṣṣ*	ṇṣṣṣ		*S. 50.
o 1	ṛṇ	ṛṇṣ	—	—	ṛṇ*	*これは ṇṛṇṣ と同じ語根から來たものであらうから本來は ṇon とは別なものであらう.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
o 1	ሾር	ሾርኳ	—	—		
g 1	ገላላ	ገላላኳ	ገላላ*	ገላላኳ		*S. 52.
g 1	ገላዩር	ገላዩር(ኤ)	[ገላዩር]	ገላዩር(ኤ)		} 同義
o 1	ሾር	ሾርኳ	[ሾር]	ሾርኳ		
g 1	ገላሾ	ገላሾኳ	ገላሾ*	ገላሾኳ**	ገላሾኳ(J.)	*S. 52; **M. 7219, 7251.
g 1	ገላሾገ	ገላሾገኳ	ገላሾገ*	ገላሾገኳ		*S. 52.
g 1	ገላሾገ	ገላሾገኳ	[ገላሾገ](?)	ገላሾገኳ		
o 1	ደር	ደርኳ	—	—		
o 2	ሾገ	ደሾገኳ	ደሾገ	ደሾገኳ	ሾገ(ኤ)*	*J. は ደሾገ をも加へる.
o 2	ሾግ	ደሾግ	ደሾግ	ደሾግ*		*M. 6584.
o 2	ሾገ(ኤ)	ደሾገኳ	ደሾገ	ደሾገኳ	ሾገኳ	
o 2	ሾግ	ደሾግኳ	ደሾግ*	ደሾግኳ		*S. 50.
o 1	ደር { I. ደርኳ II. ሾርኳ	— —	— —	— —	ሾር(ኤ)*	I. = ደር; *M. 6641. II. 能: 現, 未に ሾር をも用ひる.
o1(?)	ሾግ	ደሾግኳ		ደሾግኳ		
o1(?)	稀 ሾር	ደሾርኳ	ደር*	ደሾርኳ	ደርኳ	*M. 7200.
o 1	稀 ሾግ	ደሾግኳ		ደሾግኳ	ሾግ, ሾር(ኤ)	
o 1	ሾገ	ደሾገኳ	[ሾገ]	ደሾገኳ	ሾገኳ (J.)	Cf. ሾገ

種 別	能 動			受 動			命 令	備 考
	現 在 未	在 來	過 去	現 在 未	在 來	過 去		
o 2	འ		(བ)འུམ	བའ	བའུམ	(བ)འུམ(ས)		
o 1	འང		འངས	—	—			
o 2	འད		བའད	བའད	བའད			
o 1	འབ		འབས	—	—	འབས		
o 1	འམ		(བ)འུམས	བའམ	བའུམས	(བ)འུམ(ས)		
o 2	འར		བའར*	བའར**	བའར	(བ)འར		*S. 48; **S. 50.
o 2	འེ		བའེ*	བའེ**	བའེ			*S. 48; **S. 50.
活用なし o 2	འོ	I. འོ II. བའོས	—	—	བའོས	འོས		
o 2	འོམ	{ (བ)འོམས } { བའོམས }	བའོམ	{ བའོམས } { བའོམས* }	(བ)འོམ(ས)			*M. 5602.
g 1	མའེ		མའེས	[མའེ]	མའེས			
g 1	མའོ		མའོས	[མའོ]	མའོས			Cf. མའོ
g 1	མའོག	{ མའོགས }	{ མའོག* }	{ མའོགས }	{ མའོག }			*J. は མའོག を加へる. S. 50
g 2		{ མའོགས }	{ མའོག* }	{ མའོགས }				には མའོགས を用ふ.
g2外	མའོར	{ མའོར } { མའོར }	བའོར*	བའོར	བའོར			Cf. བའོར II.; *S. 50.
b 1	བའའ		བའའས	བའའ*	བའའ			*S. 50.
b 1	བའིག		བའིགས	བའིག*	བའིགས			*S. 50.
b 1	བའུམ		བའུམས	བའུམ*	བའུམས			*S. 50.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
b 1	བཏོ	བཏོས	[བཏོ]	བཏོས		Cf. བཏོ
o 1	ཐང	ཐངས	ཐང	ཐངས		
o 2		བཞངས	བཞང	བཞངས		
o 2	ཐུ	(བ)ཐུང	བཐུ	བཐུས		
o 2	ཐུ(ཐ)	བཐུས*	བཐུས**	བཐུས		*བཐུས (S. 48.); **S. 50.
o 2	ཐྱ	བཐྱངས	བཐྱང	བཐྱངས		
命. のみ 活用	ཐུ(ཐ)	ཐུས	ཐུས	ཐུས	ཐུ	
	o 2	བཐུས	བཐུས	བཐུས		
o 2	ཐུ	བཐུ	བཐུ	བཐུ*	ཐུ	*M. 420.
o 2	ཐྱ(ཐ)					
b 1	(ཐ)བཐྱ	བཐྱས	བཐྱ	བཐྱས*	བཐྱ(J.)	*M. 7438, 7444.
b 1	(ཐ)བཏོ	བཏོས*	བཏོས**	བཏོས	བཏོས	*S. 48.; **S. 50.
g2外	(ཐ)བཏོ					
g2外	(ཐ)བཏོ					
o 2	ཐུ	བཐུ	བཐུ	བཐུ	ཐུ	
o 2	ཐུ	བཐུ	བཐུ	བཐུ		
o 2	ཐྱ	བཐྱ	བཐྱ	བཐྱ		
o 2	ཐྱ	བཐྱ	བཐྱ	བཐྱ		
o 2	ཐྱ	(བ)ཐྱ	བཐྱ	བཐྱ*	(བ)ཐྱ(ཐ)	*M. 6343.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
o 2	ᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ*	(ᄒ)ᄒᄒᄒ (D.)	*M. 5339.
o 2	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ		
o 2	ᄒ	ᄒᄒ	ᄒ	ᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ	Cf. ᄒᄒ.
o 2	ᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ(ᄒ)	
o 2	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ		
o 2	ᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ	ᄒ	ᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ(ᄒ)	
o 2	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒ(ᄒ)*	*J. は ᄒᄒᄒ を加へる.
o 2	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	(ᄒᄒᄒ)	ᄒᄒᄒ		
o 2	ᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒ	ᄒᄒᄒ	(ᄒ)ᄒᄒ(ᄒ)	
os2外	ᄒᄒ	ᄒᄒ	(ᄒᄒ) (?)	ᄒᄒ		ᄒ が基本子音であらう.
o 2	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ		
os2	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ		{ ᄒ が基本子音であらう; Cf. ᄒᄒᄒ
o 2	ᄒᄒᄒ	{ ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	{ ᄒᄒᄒ(ᄒ)	
o 1	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ		
os2	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ(ᄒ)	ᄒ が基本子音であらう; Cf. ᄒᄒᄒ
命. のみ 活用	ᄒᄒᄒ	(ᄒᄒᄒ)	ᄒᄒᄒ*	(ᄒᄒᄒ)	ᄒᄒᄒ	*S. 52.
命. のみ 活用	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	Cf. ᄒᄒᄒ II.
g 1	ᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ	ᄒᄒᄒᄒ*	ᄒᄒᄒᄒ**		*ᄒᄒᄒ(?); **M. 2773.
g 1	ᄒᄒ	ᄒᄒᄒ	{ ᄒᄒ*	ᄒᄒᄒ		
g 2	{ (ᄒ)ᄒᄒ		{ (ᄒ)ᄒᄒ			Cf. ᄒᄒᄒ, ᄒᄒᄒ; S. 52.

種 別	能 動		受 動		命 令	備 考
	現 在 未 來	過 去	現 在 未 來	過 去		
g 2	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	*S. 52. D. J. は ᄋᄋᄋᄋ を加へる.
活用なし g 2	ᄋᄋᄋᄋ	I. ᄋᄋᄋᄋ II. ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	II. Cf. ᄋᄋᄋᄋ
g 2	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
命. のみ 活用	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ (D.)	
g 2	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	[ᄋᄋᄋᄋ]	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ; *S. 48.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ; *S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ		*S. 48; **S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	*S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ***		*S. 48; **S. 50; ***M. 2595.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ		*S. 48; **S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ		*S. 48; **S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ*	ᄋᄋᄋᄋ**	ᄋᄋᄋᄋ		*S. 48; **S. 50.
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ		Cf. ᄋᄋᄋᄋ
b 1	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	ᄋᄋᄋᄋ	Cf. ᄋᄋᄋᄋ